



岡山大学病院
OKAYAMA UNIV. HOSPITAL

歯学だより Vol.10

(平成26年度広報誌)



2015年

岡山大学歯学部

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 歯学系

岡山大学病院 歯科系 広報専門部会

■ 目 次 ■

◇巻頭言	「歯学部現況報告」		
		岡山大学歯学部長	窪木 拓男 7
◇挨拶			
	「大学院医歯薬学総合研究科から」		
	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 副研究科長	浅海 淳一	13
	「岡山大学病院歯科系診療の現状と今後」		
	岡山大学病院歯科系代表副病院長	飯田 征二	15
	「臨床実習の質の確保のための取り組みと課題」		
	岡山大学病院副病院長（教育・研究（歯科）担当）	宮脇 卓也	17
	「歯学部先端領域研究センターのセンター長に就任して」		
	歯学部 先端領域研究センター長	滝川 正春	19
◇トピックス			
●	文部科学省 課題解決型高度医療人材養成プログラム選定事業に採択 「健康長寿社会を担う歯科医学教育改革 —死生学や地域包括ケアモデルを導入した医科歯科連携教育体制の構築—」		
		窪木 拓男、曾我 賢彦、村田 尚道	20
	特任助教挨拶 医療教育統合開発センター 歯科医学教育改革部門		
	「着任のご挨拶」	武田 宏明	23
	〃	杉本 恭子	24
●	IADR (Boston)において Distinguish Scientist Award を受賞して		
		滝川 正春	25
●	歯学教育・国際交流推進センター 助教就任挨拶		
	「着任のご挨拶」	前田 あずさ	26
	〃	園井 教裕	27

〃 川瀬 明子 28

- ハイフォン医科薬科大学と共同でベトナムに国際歯科センターを開設
ハイフォン医科薬科大学歯学部 中島 隆 30

◇ 着任・転出・退職教員より

【着任】

「就任のご挨拶」	歯科薬理学分野 小崎 健一	32
「着任のご挨拶」	生体材料学分野 岡田 正弘	34
〃	予防歯科 入江 浩一郎	35
〃	インプラント再生補綴学分野 三野 卓哉	36
〃	咬合・有床義歯補綴学分野 荒木 大介	37
〃	歯科矯正学分野 星島 光博	38
〃	歯科矯正学分野 早野 暁	39
〃	歯周病態学分野 小林 寛也	40
〃	歯周病態学分野 本郷 昌一	41
〃	歯周科 海老沼 孝至	42
〃	歯周病態学分野 富川 知子	43
〃	歯周病態学分野 山城 圭介	44
〃	歯科麻酔・特別支援歯学分野 丸濱 美菜子	45
〃	口腔形態学分野 内部 健太	46
「着任のご挨拶」	新医療研究開発センター 伊東 孝	48
「着任のご挨拶と留学記」	歯周病態学分野 池田 淳史	49

【転出】

「転出のご挨拶」	松本歯科大学 歯科薬理学講座 十川 紀夫	51
〃	北海道大学大学院歯学研究科 生体材料工学教室 吉田 靖弘	52
〃	大阪歯科大学歯学部 薬理学講座 河井 まりこ	53
〃	神奈川歯科大学大学院歯学研究科 口腔科学講座	

	歯周病学分野	工藤 値英子	54
〃	大阪大学歯学部附属病院 口腔病態系科		
	(口腔外科1 (制御系))	水谷 雅英	55
〃		菅原 康代	56
「出向のご挨拶」	歯科麻酔・特別支援歯学分野	友安 弓子	57
「転任のご挨拶」	福岡歯科大学 高齢者歯科	瀧内 博也	58

【退職】

退職のご挨拶		岸本 悦央	60
--------	--	-------	----

◇【本年度の活動】

「文部科学省 課題解決型高度医療人材養成プログラム キックオフシンポジウムを開催」

医療支援歯科治療部 曾我 賢彦 61

「International Symposium on Bio-imaging and Gene Targeting Science in Okayama に参加して」

歯科矯正学分野 上岡 寛 67

「口腔癌唯一認可の分子標的抗癌剤のPETプローブ化と、PET画像による同抗癌剤効果判定試験の開発にむけて」

歯科放射線・口腔診断科 村上 純 68

◇【トピックス】

「“教育功労賞”受賞に際して」

生体材料学分野 入江正郎 70

「歯科系外来リスクマネージャーチームが【榎の木賞】を授賞」

総合歯科 白井 肇 71

◇【海外より】

「ハーバード留学記」

歯科矯正学分野 石原 嘉人 73

「フィラデルフィア留学記」

口腔顎顔面外科学分野 栗尾 奈愛 74

「インディアナポリスより」

口腔顎顔面外科学分野 奥井 達雄 76

「留学生活 in Boston」

歯周病態学分野 平井 公人 78

◇【留学生レポート】

「ブラジルからの留学生を岡山大学歯学部へ迎えて」

歯科総合診断室 藤田 麻里子 79

「台湾の留学生の方を迎えて」

小児歯科学分野 高島 由紀子 81

「International Exchange Student Program Report」

Wang, Ya-Hsuan (王雅璇)

School of Dentistry, Taipei Medical University 83

「A trip I won't ever forget」

Leticia Oliveira

University of São Paulo, Brazil 86

◇【岡山歯学会奨励論文受賞者寄稿】

「岡山歯学会 奨励論文賞を受賞して」

高松赤十字病院 歯科口腔外科 植松(前田) 彩 89

「岡山歯学会 奨励論文賞を受賞して」

いわき病院 歯科口腔外科 堀切 優 91

◇【卒後臨床研修センターより】

「岡山大学病院卒後臨床研修の現状と課題」

総合歯科 白井 肇 92

「単独型研修プログラムを選択して」

歯周病態学分野 伊東 昌洋 94

「複合型研修プログラムを選択して」

歯科麻酔・特別支援歯学分野 三宅 沙紀 96

◇【学部学生より】

「東京デザイナーズウィークへ出展して」

歯学部 6年 実藤 和典 98

「スチューデントクリニシャン・リサーチ・プログラムに参加して」

歯学部 5年 大山 剛平 100

◇【歯科衛生士室から】

「平成 26 年度 歯科衛生士室 活動報告」

歯科衛生士 三浦 留美

歯科衛生士 高橋 明子 101

◆歯と口の健康週間イベントを開催◆

◆第 35 回 岡山歯学会学術大会 歯科衛生士セッション報告◆

◆11 月 8 日「いい歯の日」イベント開催◆

◆受託実習受け入れ状況◆

◇【歯科技工室から】

「平成 26 年度の技工室」

診療支援施設技工室 神 桂二 104

◇【編集後記】

総合歯科 白井 肇 107



「歯学部現況報告」

岡山大学歯学部長
窪木拓男

平成26年度はめまぐるしい1年であった。ミッションの再定義が終了し、通称日本地図が公表された。その中で、岡山大学歯学部のミッションは、「国際社会や超高齢社会で活躍する研究マインドを持つ人材養成、医用材料開発や分子イメージング等の教育研究拠点、医科歯科連携診療」と記述されている。歯学領域において、重要な3つの観点、すなわち、健康長寿社会実現への貢献、医療イノベーションの創出、国際的な医療課題の解決が書き込まれており、まずまずのできと思っている。

平成26年度の最も注目すべき成果は、文部科学省 課題解決型高度医療人材養成プログラムに採択されたことである。募集要項が平成26年初頭に開示されたが、大変政策色の強い募集であり、大学毎に申請するのではなく、大学間の連携をとった上で申請をし、全国で2グループしか採択されないという。当初から、岡山大学はこのような事業が必要であることを文部科学省に訴えてきた経緯があり、申請担当大学として即刻手を挙げることを決め、執行部各位や飯田教授、医療支援歯科治療部の曾我准教授とともに精力的に準備をした。ミッションの再定義にあるように、現在の岡山大学歯学部の強みの一つが、周術期管理やNSTのような多職種連携診療を歯学教育に応用し、これを在宅介護現場に広めていくことにあるからである。幸い、全国の歯学部長と連絡を取り合って、だんだんとその枠組みがはっきりとしてきた。何しろ、2グループしか採択されないというのであるから、水面下での攻防もあり、大変苦しい思いも味わった。一方で、北海道大学、大阪大学、九州大学、長崎大学、鹿児島大学、金沢大学、昭和大学、日本大学、岩手医科大学、兵庫医科大学の連携大学を得たことは望外の喜びであった。結果的には、私立大学を含めて全ての連携大学が医学部を持つ大学であり、医科歯科連携を強く推進するプラットフォームを提供することになった。さらには、この歯学教育改革コンソーシアムを最新の老年学のエッセンスで特徴付けるために、東京大学高齢社会総合研究機構、東京大学死生学・応用倫理センター、東京都健康長寿医療

研究センター、国立長寿医療研究センターに加わって頂き、その機能やカリキュラムに光を与えた。このプロセスでは、以前文部科学省から大学院G P 事業を頂いた経験が大変役立った。文部科学省には事前相談に総計4回伺って申請に足る内容であることを確認して頂き、最後の最後まで申請書のブラッシュアップに努めた。

4月には、岡山大学が在宅・訪問歯科診療参加型臨床実習を開始したことを記念して、この歯学教育改革コンソーシアムのメンバーに急遽御願いをし、全国の歯学部から参加者を集めてキックオフシンポジウムを開催した。岡山大学からは、宮脇卓也副病院長、前田 茂准教授と私が登壇し、岡山大学の学外臨床講師制度を利用した在宅・訪問歯科診療参加型臨床実習の概要を説明した。また、日本歯科大学から高橋賢晃先生に記念講演を御願いした。さらに、現場からということで、近藤修六臨床講師、吉富達志臨床講師、木村年秀臨床教授に御願いして、本制度の可能性について、素晴らしいご講演を頂いた。今から思えば、忙しいなか、このキックオフシンポジウムを強行したことが採択に向けた大きな一歩に繋がったと思える。

岡山大学歯学部 在宅・訪問歯科診療参加型臨床実習教育プロジェクト キックオフシンポジウム	
目的:	在宅・訪問歯科診療参加型臨床実習における教育効果の向上
日時:	平成26年4月27日(日)13:00~16:00
場所:	岡山大学歯学部棟 4階 第1講義室
対象:	岡山大学歯学部臨床実習生・岡山大学歯学部教員・岡山大学歯学部在宅・訪問歯科診療担当臨床講師およびスタッフ・他大学等教員・スタッフ
参加費:	無料
主催:	岡山大学歯学部
実行委員会:	臨床実習実施部会
実行委員長:	前田 茂
プログラム	
13:00	開会の辞(歯学部長 窪木拓男)
13:05-13:30	KIGOSF 講演 「岡山大学歯学部の臨床教育戦略」 歯学部長 窪木拓男
13:30-14:30	記念講演 「在宅・訪問歯科診療参加型臨床実習において教育効果を向上させるためには」 日本歯科大学附属病院 口腔リハビリテーション科 講師 高橋賢晃
14:30-15:00	教育講演 「在宅・訪問歯科診療における全身管理」 岡山大学病院 歯科麻酔科 准教授 前田 茂
15:00-16:00	シンポジウム 座長(教務委員長 森田 学) 「在宅・訪問歯科診療における臨床実習教育の展望」 岡山大学歯学部での在宅・訪問歯科診療参加型臨床実習の概要 臨床実習実施部会長 宮脇卓也 ・在宅・訪問歯科診療の現場から 豊数市 近藤歯科医院 院長 近藤修六 岡山協立病院 歯科医長 吉富達志 三豊総合病院 歯科保健センター長 木村年秀 ・ディスカッション
16:00	閉会の辞(歯科系代表副病院長 飯田征二)

5月末には、ハイフォン医科薬科大学において、国際歯科センターの開設式典に出席した。本プロジェクトは、岡山大学歯学部とハイフォン医科薬科大学の共同プロジェクトである。日本から派遣された中島君は本当によくやっており、地域に溶け込んで、邦人支援に一役買っているばかりか、ハイフォン医科薬科大学歯学部の教育改革に尽力し、今ではこの大学に必須な人材となっている。我々の分野(インプラント再生補綴学)にとっても、シンガポールJGHに続いての海外歯科医師派遣であるが、ハイフォンの方は全くの初めてという状況の中、Lieu学部長との強い信頼関係もあり、素晴らしい活動に育ってきた。今年度は、医学部、薬学部を巻き込んで、大学間交流協定に締結レベルを上げる予定にしている。今後のASEAN統合を睨んで、このような産官学が共同して医療資源を輸出する活動は大変大切になるものと確信している。本年度は、有り難いことに、日本学生支援機構から本短期派遣事業(交流協定に基づくもの)に対して経済的な支援を頂けることになった。ぜひ、学生諸君もODAPUS制度を使って、ハイフォン医科薬科大学に赴いて欲しい。



8月には、恒例となっている臨床研究デザインワークショップを開催した。今回からは、岡山大学病院と岡山大学大学院医歯薬学総合研究科が主催となり、歯学部（歯学系）のイベントから大きくグレードアップした。特に、岡山大学病院の新医療研究開発センターの那須教授や樋之津教授にマネジメントに加わっていただいたことは、本プロジェクトの厚みを増し、昨今注目を浴びているレギュラトリーサイエンスと臨床研究方法論を併せて学ぶことができる機会を全国に向けて提供できることになった。

9月には、課題解決型の予算が使用できるようになり、歯学教育改革コンソーシアム設立記念講演会・シンポジウムが開催された。特に、東京大学高齢社会総合研究機構の飯島勝矢准教授にいらして頂き、老年学を中心とした地域包括ケアの展開を熱くお話し頂いた。飯島先生は、前述のように第123回日本補綴歯科学会で辻教授とともにお話し頂いたのが縁である。エビデンスに基づく虚弱予防のお話しは本当にインパクトがあった。すなわち、メタボ対策の時期を乗り越えた後期高齢者においては、厳密な高脂血症の治療に力を入れるよりも、むしろ良質の栄養摂取や運動を中心とした虚弱予防が重要であることを教えて頂いた。そのためにも、高齢者においては、咀嚼機能の維持が大変重要であることを強調頂き、歯科が立ち向かうべき大きなターゲットを得た気持ちになった。今後も柏プロジェクトとのコラボなど多くの期待されるプロジェクトで一緒にできそうである。また、昭和大学から片岡教授や弘中教授、大阪大学から池邊講師にいらして頂き、コンソーシアムの結束を固めるに大変有意義な会となった。

9月8日には、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科が申請した橋渡し研究加速ネットワークプログラム「健康寿命の延伸を目指した革新的医療研究開発拠点」が採択された。本事業は、すでに岡山大学病院が採択されている臨床研究中核病院整備事業に加えての快挙であり、

主催：岡山大学大学院医歯薬学総合研究科、岡山大学病院

第8回 **臨床研究デザインワークショップ** 参加無料

2014 **8/2** 特別講演
17:00~18:30 「サンプルサイズ設計の理論と実際」
講師：岡山大学病院 新医療研究開発センター 三橋利晴 先生

8/3 臨床研究デザインワークショップ
9:00~18:00

岡山大学鹿田キャンパス
歯学部棟4階 第1講義室 岡山市北区鹿田町2-5-1

医・歯・薬学系大学院生、
臨床研究を志す医療従事者

本ワークショップでは、臨床研究実施に必須の能力である、偶然とした臨床現場・経験からリサーチエッセンスを捉える方法（さらにはリサーチエッセンスを構造化し、質の高い研究計画を立案する方法）について、グループワークを通じて実践的学習が予定されています。
臨床研究実施を志す方に広く参加いただけるよう、世界中に知れる臨床エッセンスの創造を目指している場でもあります。ぜひご自身の学びに活かしてください。
特別講演のみにご参加いただけます。

最新情報更新 **7/25** Fri

ワークショップ参加費無料（下記フォームからお申し込み下さい）
http://www.bsc.okayama-u.ac.jp/mdps/news_615.html

特別講演は、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科の博士課程修了生（研究開発推進センター）の専攻領域に特化したとみなされる講演として開催されます。ご参加の際は、岡山大学病院新医療研究開発センターの受付までお申し込みください。
特別講演には事前申し込みが必要です。お申し込みは、下記お問い合わせ先までご連絡ください。

◆主催：岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 研究科長 谷本貴司、岡山大学病院 総務部長 橋本博樹
◆協賛：新医療研究開発センター 推進部長 三橋利晴 医学部 歯学部長 樋之津 孝
◆お問い合わせ先：新医療研究開発センター 広報 三橋 利晴
[okimura@md.okayama-u.ac.jp] TEL:086-235-6682 FAX:086-235-6684

文部科学省 課題解決型高度医療人材養成プログラム
「健康長寿社会を担う歯科医学教育改革」
歯学教育改革コンソーシアム設立記念講演会
(岡山大学歯学部FD)

日時：平成26年9月26日（金）
場所：岡山大学歯学部棟 4階 第1講義室 聴講無料

17時30分～18時00分

文部科学省 課題解決型高度医療人材養成プログラム
「健康長寿社会を担う歯科医学教育改革」について
岡山大学歯学部長 窪木 拓男

18時10分～19時30分 歯学教育改革
コンソーシアム
Established in 2014

「虚弱・サルコペニア予防における
医科歯科連携の重要性(仮題)」

東京大学高齢社会総合研究機構
東京大学歯学部在宅医療学拠点
運営委員会委員

飯島勝矢准教授

連携大学：北海道大学、東北大学、大阪大学、九州大学、香川大学、鹿児島大学、奇形医科大学、
日本大学、昭和大学、兵庫医科大学

協力施設：東京大学高齢社会総合研究機構、東京都健康長寿医療センター、国立長寿医療研究センター

主催：岡山大学歯学部（窪木拓男学部長、森田 幸教授助委員長）
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科（飯田正二助院長、窪木拓男教授）
共催：岡山大学大学院医歯薬学総合研究科（谷本貴司研究科長）
岡山大学病院（榎野清史病院長）

本特別講演は、歯学部FDとして、また大学院博士課程修了科目の「研究方法論（基礎・応用）の発展に貢献したとみなされる講演員としてカウントすることが可能です。出席記録簿を持参して、関係担当教授の「押印」を捺印して下さい。監修・大学院生・学生、興味のある方はどなたでもご参加下さい。
講演会に関するお問い合わせは岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 インフラ/再生医療学分野 窪木拓男教授までお願いいたします。

旧帝大に加えて岡山大学と慶應義塾大学が採択されたという点からも大変嬉しい成果である。この申請のヒアリングにも歯学系代表として参加し、健康寿命の延伸を目指した医療機器開発という面で医科歯科連携体制を強調した、この際も、課題解決型高度医療人材養成プログラム採択によりお墨付きを頂いた歯学教育改革コンソーシアムが役立ったことは言うまでもない。

10月には、ソウル国立大学での再生関連のシンポジウムに招かれ発表した。ソウル国立大学の歯学部長のリー先生は、第2回岡山医療教育国際シンポジウムからの友達であり、学生交流や研究者交流を再開することで合意した。韓国トップ校であり、立派な歯学部附属病院の建て替え作業を行っており、羨ましい限りである。11月には、佐々木教授ご一行とともにハノイ医科大学で創立100周年記念式典に出席し、日本（岡山大学）の歯学部のカリキュラムや分野構成をベトナムの全歯学部長の前で発表した。ベトナムの歯学教育は今まさに劇的に発展しようとしており、日本をよいお手本としようとしている。また、ハイフォン医科薬科大学では、松尾前学部長、滝川元学部長とともに創立35周年記念式典に出席し、周術期管理に関する講演を行った。6月同様、日本に対する強い期待をひしひしと感ずる機会となった。

1月には、昨年から開始した短期留学生（特別聴講学生）向けの英語授業シリーズを開講した。本年度は、ブラジルから6名、台湾から4名、ベトナムから2名が来学し、学生主催のウェルカムパーティと英語授業、臨床見学実習、研究室見学に参加した。英語授業シリーズは、教養科目として正式に登録され、毎年開講されることになった。

2月には、課題解決型高度医療人材養成プログラムのキックオフシンポジウムを開催した。文部科学省から島居剛志医学教育課長補佐にお越し頂き、本プログラムの目的や採択状況についてお話を頂いた。また、東京大学死生学・応用倫理センターから会田薫子准教授に「長寿時代のエンドオブライフケア」についてお話を頂いた。いつもながら、職種を越えた医療人スピリットを奮い立たせる素晴らしいご講演であった。また、医学部歯科口腔外科の研修医教育の状況について、現在全国医学部附属病院歯科口腔外科科長会議会長の野口先生、事務局の丹沢先生に来て頂き、現状についてお話し頂いた。また、連携大学からは各校特徴ある教育活動についてご発表頂き、長崎大学や鹿児島大学の離島実習など興味深く拝聴した。何よりも、各連携大学や協力



施設の先生方のお人柄が素晴らしく、夕方の懇親会では本当に意気投合した。

最期に、文部科学省 科学技術試験研究委託事業である分子イメージング研究戦略推進プログラムが最終年度となり、International Symposium on Bio-Imaging and Gene Targeting Sciences in Okayamaを開催した。理化学研究所からは西道先生にいらして頂きアルツハイマー病の最新知見をご発表頂いた。また、岡山大学の松浦教授にはOMICで推進されている分子イメージング研究の現状と将来展望についてお話し頂いた。本シンポジウムでは、久保田教授、松本教授、大橋教授、上岡教授にコーディネーターとなっていていただき、国内外の有名研究者を招聘し、先端研究を垣間見ることができた。研究面では、歯科からだけの見方を提供する時期はもうすでに過ぎ去りつつあり、医科と歯科の垣根を取り去った上でも通用する、ライフサイエンスや医療の共通項としての新規知見を歯科から発信する必要性を強く感じている。

このように改めて並べてみると、本当に忙しい一年であった。しかし、課題解決型高度医療人材養成プログラムの採択が、橋渡し研究加速ネットワークプログラムの採択に結びつくように、良い風を吹かせ続けることができれば、岡山大学はますます発展すると確信している。このためには、自分の価値観や固定概念に引きこもることなく、他の分野から見ても素晴らしい岡山大学歯学部発の新しい価値観を、教育、研究、臨床各面において提供し続けなくてはならないだろう。まずは、今年度に予定されている、第2期中期目標・中期計画期間の報告を素晴らしい形でまとめ上げ、この成果をもって、岡山大学歯学部が世界に認知された教育研究臨床拠点として、胸を張れる存在であることを広く主張したい。

学部長として常々、歯学部構成員に御願しているところだが、歯学部は各分野の集合体として捉えることができる。各分野が、日本一のビジョンを掲げ、それに沿った成果をあげておれば、自ずと、岡山大学歯学部は日本一になる。歯学部（病院歯科系、研究科歯学系）にとっては、科学研究費補助金などの外部資金獲得数・総額、質の高い論文の発表状況、大学院生や研修医の数、国費外国人留学生の数、GP事業の採択数、大学病院の患者数、診療費用請求額総額、新しい臨床技術の開発等が重要な評価項目となる。あと残り1年となった中期目標・中期計画期間であるが、最後まで努力を積み重ねて頂きたい。岡山大学歯学部の将来は、皆さんにかかっているのだから。その意味では、国家試験合格率が、昨年度は全国国立大学1位、今年度は全国国立大学2位と成果が上がっていることは素晴らしい。学生の健闘とそれを支えて頂いた先生方に心より御礼を申しあげたい。

「大学院医歯薬学総合研究科から」

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 副研究科長
浅海 淳一

研究科長の再任に伴いもう1年現職に留まることになりました。

さて、研究科においても、第2期中期計画の最終年ということで、現在その最終報告および次期中期計画へ向けた準備がなされています。この第2期中期計画では、本研究科では総合大学院の特色を生かし、学士課程カリキュラムと有機的に連携し、学部から大学院までを考慮に入れたカリキュラムの再編整理を進めて参りました。医学系ではARTプログラムにあるように学部から大学院へのシームレスな体制が確立されており、歯学系でもこのような体制作りが望まれます。ディプロマ・ポリシーならびにカリキュラム・ポリシーが再構築され、大学院生の学力の質を保証すべく学部教育との関連性を視野に入れてカリキュラムの見直しを実施するなどカリキュラムの再編整理はある程度進んで来ました。コースワーク主体による教育の充実を図るため、多岐にわたる履修コースを設け、共通コア科目や各専門科目を配置し、また国立感染症研究所をはじめ数機関と連携大学院科目も開設しています。大学院教育改革支援プログラムである医療系大学院高度臨床専門医育成コース等の特色ある教育プロジェクトを実施し、研究プロジェクトへ参加できる体制を整えています。また、臨床系の学生が基礎系で研究する体制も整って来ていますし、専攻間での学生交流も比較的活発に行われています。そういった意味では、大学院での体制は十分に整備されて来ており、選択肢は広がって来ていると思います。さらには、自然科学研究科工学系等と連携し、異分野融合型の教育も考慮に入れて、各専攻の授業内容の精選と見直しを進め、コア・カリキュラムを確立すると同時に、習得すべき基準及び到達すべき学習成果を明確にする必要があるでしょう。

今後の課題として、留学生の増加が望まれています。現在その割合が低いことがあり、英語による授業実施はわずかです。英語によるコース授業を展開するなど、大学院教育における教育方法や教授内容の国際化を一層推進する必要があります。そのためには、外国人留学生の増加と同時に外国人教員の採用を考える必要があるかもしれません。また、留学生を増やすためには、英語による授業の拡充やそれとともに留学生の日本語コミュニケーションへの対応も進めるべきと考えます。その一方、博士課程医学系では、学位論文はすべて英語によるものであり、歯学系でも英語による論文が多いことや講義においてもスライド等の資料は英語表記のものが多く、学会発表も英語で行われている点は十分評価できる内容と考えます。

このように研究科におきましては、定員充足も果たしており、安定しておりますが、今後ますますの発展に皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



写真1 浅海の両隣はハサヌディン大学からの留学生で大学院1年のDr. Irfan Sugiantoと2014年から1年間の予定で客員研究員としてSão Paulo大学から来ているDr. Karina Panelli Santos



写真2 2015年2月末、香港大学5年生の4人が歯学部を訪問見学しました。

「岡山大学病院歯科系診療の現状と今後」



歯科系代表副病院長
飯田 征二

岡山大学病院副病院長に就任し1年が経過いたしました。昨年度は年度当初の消費税増税の影響等から、私費治療症例の減少が歯科系の運営にダメージが生じ、苦しい運営の1年だったといえます。

とは言え、歯科系診療科のアクティビティは高く、常に前向きの姿勢が貫かれており、近年なかったこのような収益の落ち込みに対して、その問題点を細かく分析し、将来にわたって病院の一分野としての責務を全うするべく、歯科系診療科の体力増強に繋げる活動が推進されております。

新年度からの新たな動きとして収益についての医療費率の検討、診療室の効率的運用、新たな診療中核部門の歯科系での開設があげられます。特に診療中核として、新年度には、私の専門でもある口唇口蓋裂治療についての集学的治療施設口唇口蓋裂総合治療センターを疾患センターとして初めて歯科系診療科内（矯正歯科）に開設されることになり、医科系との密な連携から中四国の中心的施設を担っていければと思っております。

また、本院の特徴でもある医科歯科連携についても、医療支援歯科治療部を中心とした活動に、新年度の人員の増員ならびに診療システムの効率化による歯科系診療科内での連携強化が図られ、一層医科歯科連携は充実したものになることと思います。

一方、教育機関である本院の性格から、学部学生による臨床実習や研修医教育の充実が常に大きな課題となっております。歯科医師としての素養を培う上で最も大事な過程であり、卒業生に岡山大学出身という看板を背負っていただく上で、恥ずかしくない教育を施すことが重要です。岡山大学歯学部では、常に効率的な新たな臨床教育を導入し、日本における歯科臨床教育をリードしていく面も求められております。昨年度窪木学部長の発案により文部科学省教育GPにより形成された9大学歯学部（国立6大学、私立3大学）、2医学部口腔外科講座、3研究センターとの教育コンソーシアムは今後の長寿社会に対する歯学教育をリードするものであり、在宅医療や医科歯科連携などを中心とした教育改革には非常に重要な活

動となることは疑いのないところです。また、岡山大学が主導あるいは独自に取り組む教育活動として、宮脇副病院長が発案・導入を行っております、効率的な学生実習の症例管理システム（電子ログブック）や在宅での高齢者歯科医療用シミュレーター、あるいは今年度からはじまる学生・研修医への携帯型端末を用いた臨床教育の ICT の導入などが挙げられ、臨床教育面での活発な動きは、特筆すべきものと思います。

新たな年度を迎え、まだまだ、課題は多いかと思いますが、岡山大学歯学部の特徴を一層発揮できるよう臨床の場を提供し支えていければと思っております。



「臨床実習の質の確保のための取り組みと課題」



岡山大学病院副病院長（教育・研究（歯科）担当）

宮脇 卓也

歯科系教育・研究担当副病院長を拝命して4年がたちましたが、引き続き岡山大学、岡山大学病院、歯学部的发展に尽くしたいと存じます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

歯科系教育・研究担当副病院長としての役割は先の4年間と変わりなく、臨床実習実施部会長として歯学部学生の臨床実習の責任者であるということ、さらに病院での臨床教育に関して主に、卒後研修歯科医の教育、コ・デンタルスタッフの教育を支援する立場にあります。本年度の「歯学だより」においても、昨年同様に臨床実習におけるこれまでの取り組みとこれから取り組むべきものについて述べさせていただきます。

これまでの4年間での臨床実習の取り組みとしては、1) 臨床実習の見える化、2) 臨床実習の運営に学生の意見を反映、3) 臨床実習における態度評価の導入、4) Advanced OSCEの一部導入、5) 在宅・訪問歯科診療実習の導入、6) 医療支援歯科治療部での臨床実習の導入、7) 電子ログブックの導入、8) 基礎学力のアップのための環境作り、が主なものです。

1) の「臨床実習の見える化」については、臨床実習マニュアルで、各診療科の実習内容に、コアカリキュラムに対応するように「到達目標と評価項目」を明記し、実習形式、評価をわかりやすくしました。2) の「臨床実習の運営に学生の意見を反映」については、まず、毎年、学生にアンケート調査を行い、臨床実習に対する建設的な意見を募り、臨床実習にフィードバックするようにしました。また、臨床実習実施部会に学生の代表を参加させ、意見を求めるようにしました。3) の「臨床実習における態度評価の導入」については、臨床実習の修了認定のひとつとして、「態度評価」を設けました。臨床実習には、知識と技術だけでなく、医療者としてふさわしい態度が求められます。態度評価を導入したことで、たとえ知識と技術が十分であっても、実習態度が医療人としてふさわしくなければ未修了にすることにしました。4) の「Advanced OSCEの一部導入」については、臨床実習によって習得した臨床能力の客観的評価を、一部の診療科で導入しました。今後、全診療科での導入をめざします。5) の「在宅・訪問歯科診療実習の導入」については、在宅・訪問歯科診療実習を平成24年度から開始いたしました。これは、近隣の歯科医院または病院歯科で、在宅・訪問歯科診療を行っておられる先生方を臨床講師に任命し、

学生全員をそこに派遣し、在宅・訪問歯科診療を学ばせる企画です。今後、この分野はさらに重点化していく必要があります。現在、在宅・訪問歯科診療シミュレーション教育の導入にも取り組んでいます。6)の「医療支援歯科治療部での臨床実習の導入」については、私が臨床実習実施部会長に就任して早期に、修了認定のひとつとして医療支援歯科治療部での臨床実習を加えました。在宅・訪問歯科診療と同様に今後需要が高まる分野であると考えられますので、学生教育のみならず卒後の生涯教育においても重要だと考えております。7)の「電子ログブックの導入」については、そもそもこの電子ログブックというのは、平成23年度文部科学省先導的委託事業において作成された「診療参加型臨床実習・臨床研修連携手帳(案)(連携ログブック)」という紙の冊子を電子化したもので、全大学で必須になりつつあります。岡山大学では、大学本部から「戦略経費」による補助を受け、電子ログブックを独自に開発しました。今後、この電子ログブックは必須として扱っていきたいと思っております。学生の皆さんや指導医の先生方のご協力なしにはうまくいきませんので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。8)の「基礎学力のアップのための環境作り」については、6年生前期で行われていた臨床教授等の講義を5年生の後半に移動させ、歯学の復習を少しでも多くできる環境にしました。しかし今後は、これらは臨床実習と独立した講義ではなく、臨床実習の中に組み込んで、臨床実習をすることで、基礎学力もあわせてアップするようなシステムが必要だと考えております。そのためには、基礎分野の教員の先生方にも臨床実習に関わっていただきたいと私は考えております。

今後の課題として、

1. 初診時医療面接前での書面による同意書の取得
2. 臨床実習における指導医の資格の設定
3. 患者の皆様への広報活動
4. 態度評価における多面的評価の導入
5. 在宅・訪問歯科診療実習シミュレーション教育の充実
6. 電子ログブック用いたエビデンスに基づいた臨床実習システムの構築
7. Advanced OSCEの組織的な実施
8. 多職種連携実習の導入
9. さらなる基礎学力のアップ

に、取り組んでいくことにしております。

臨床実習は、近年、歯学教育の中で臨床実習の充実の重要性がますます強調されております。岡山大学歯学部での臨床実習の内容は、実質的には臨床の教員の先生方のご尽力で、すでになりに充実していると確信しておりますが、求められているタスクも年々多くなってきております。臨床実習の質の確保のため、臨床実習実施部会の先生方と一緒に邁進してまいりますので、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。



「歯学部先端領域研究センターのセンター長に就任して」

先端領域研究センター長
滝川 正春

平成 26 年 9 月 9 日付で歯学部先端領域研究センター（ARCOCS）のセンター長を拝命しましたので、一言ご挨拶申し上げます。

歯学部先端領域研究センター（ARCOCS）は、岡山大学歯学部と歯学部関連組織（歯学部、大学院医歯薬学総合研究科歯学系、岡山大学病院歯科系）を中心とした学術研究の強力な活性化と新研究領域開拓のため、平成 25 年 6 月に、歯学部中央研究施設（英文名 **Biodental Research Center**）を母体として設立されました。前身の中央研究施設は、それまでの形態系と機能系の共同研究室を内包する形で、形態系と機能系の二部門を設けて平成 11 年(1999 年)4 月にスタートし、各共同研究室の専任教員および併任室長が研究支援サービスに加えて各部門の研究活動を推進してきましたが、この改組では、さらに研究に重点を置き、また、研究領域を歯学系全体に拡充するため、従来の共同研究室の専任教員は本研究センターの専任教員となり、また、歯学系各分野より運営委員が併任教員として研究に参画する体制が確立されました。当初は設立に尽力された大原教授がセンター長を、杉本教授、滝川が副センター長を務めておりましたが、教授は全員併任でした。しかし、平成 26 年 4 月には私が専任教授に就任し、さらに、今回私がセンター長に就任して、名実ともに、歯学部（系）横断的な研究組織となりました。

このような設立の経緯と趣旨に則り、岡山大学歯学部先端領域研究センター（ARCOCS）では、「歯学から新研究領域を開拓し、医学・生命科学に貢献する」ことを **mission** と心得、歯学研究でフロンランナーを目指すに留まらず、新研究領域を開拓し、広く医学・生命科学に貢献できる研究を推進するとともに、その成果を歯科のみならず医療全般へ臨床応用することを目指します。

現在、上記教員に加え、外国人のポスドク 3 名を擁し、国際色豊かな組織になっており、国際交流にも力を入れていきたいと思っています。また、臨床分野の助教も研究のため出入りしており、このような人たちを増やすことにより、学部横断的なグローバルな組織へと発展させたいと思っていますので、本学歯学部関係者のご協力をお願いする次第です。

「文部科学省 課題解決型高度医療人材養成プログラム選定事業に採択」

「健康長寿社会を担う歯科医学教育改革
—死生学や地域包括ケアモデルを導入した医科歯科連携教育体制の構築—」

歯学部学部長
窪木 拓男

平成 26 年度、文部科学省は、大学・大学病院を通じて、健康長寿社会の実現に寄与できる優れた医療人材を養成するため特色ある取組を公募しました。「課題解決型高度医療人材養成プログラム」と名付けられた事業で、我が国が抱える医療現場の諸課題等に対して、科学的根拠に基づいた医療が提供でき、健康長寿社会の実現に寄与できる優れた医療人材を養成するため、大学自らが体系立てられた特色ある教育プログラム・コースを構築し、全国に普及させ得るべく、これからの時代に応じた医療人材の養成に取り組む事業を選定し支援するものです。

医師・歯科医師を対象とした人材養成を目的とする取り組み（5,000 万円以内／年で平成 26 年度から 5 年以内（予定））が 14 件公募され、そのうち「健康長寿社会の実現に貢献する歯科医療人養成」について 2 件公募されました。

岡山大学歯学部は、北海道大学、金沢大学、大阪大学、九州大学、長崎大学、鹿児島大学、岩手医科大学、昭和大学、日本大学、兵庫医科大学の計 10 校を連携校とし、計 11 校で本公募に事業名「健康長寿社会を担う歯科医学教育改革—死生学や地域包括ケアモデルを導入した医科歯科連携教育体制の構築—」を申請し、採択に至りました。今後 5 年間、これら連携大学とともに、岡山大学が中心となり、本邦に求められる歯科医学教育改革を強力に進めていくこととなります。

歯科医療が超高齢社会に適応し、国民の期待に応える必要があることは自明です。なぜなら、口腔は呼吸や摂食機能を介して命をつなぎ、尊厳や喜びを維持しながら生活を送るために必須の器官であり、この器官の感染や機能不全は生命の危機や生活の質の低下に直結するからです。これだけ超高齢社会において歯科医療の重要性が叫ばれているにもかかわらず、口腔からの感染を防ぎ、口腔機能を維持することが、病床に伏した有病者や要介護者に必須な医療要素であるというイメージを歯科医療関係者が十分共有できないでいるのは、歯学教育を担う我々の責任と言わざるを得ません。

医療はますます生活や福祉との境界を曖昧にしています。もしも、我々が在宅歯科診療を教育に真面目に含めるのであれば、在宅現場における高頻度の疾患（認知症、がん、誤嚥性肺炎、ロコモティブシンドローム、サルコペニア、低栄養等）の知識はもちろん、摂食嚥下

リハビリテーションや食形態、医療保険や介護保険制度に関わる行政法規や倫理規律、多職種との連携、地域包括ケア、死生学やAdvance Care Planning、患者の体位変換や車いすへの移乗、高齢者が住みやすい住居への改装支援、生活・介護支援等、幅広い知識を教育する必要があります。また、人生のステージや全身状況に応じた口腔内の補綴装置等の整理の方法に関する議論や、認知症と診断されたら歯科に受診いただく運動も緒についたばかりです。一方、高齢者の「食」を基盤とした健康増進、介護予防、虚弱予防の可能性が認識されつつあり、超高齢社会において歯科への期待は高まるばかりです。

このようなタイミングで、本事業が文部科学省 課題解決型高度医療人材養成プログラム（事業名：健康長寿社会を担う歯科医学教育改革）に採択されたことは大変光栄なことです。本事業は、岡山大学を申請担当大学とした計11大学（北海道大学、金沢大学、大阪大学、岡山大学、九州大学、長崎大学、鹿児島大学、岩手医科大学、日本大学、昭和大学、兵庫医科大学）に、東京大学 死生学・倫理応用センター、東京大学高齢社会総合研究機構、国立長寿医療研究センター、東京都健康長寿医療センターを合わせた歯学教育改革コンソーシアム（平成26年9月26日設立）を中心に、健康長寿社会を担う歯科医師を育てるための文理融合、医科・歯科連携、多職種連携教育改革を実現しようとするものです。

口腔から全身健康に寄与できる歯科医師、及び、急性期、回復期、維持期、栄養サポートチーム(NST)、在宅介護現場に対応できる歯科医師を育てます。また、適切な死生観に基づき、患者の病床、介護現場や終末期に寄り添えるプライマリケア歯科医を養成します。さらには、高齢者の「食」を基盤とした健康増進、介護予防、虚弱予防を目指した新しい歯学教育・研究を推進します。そのために以下の具体的方策を進めます。

1. 申請大学と連携大学や協力組織をまとめた歯学教育改革コンソーシアム（仮称）を設立し、教員FD、学生交流、相互チェック体制を整え、歯学教育改革の高度化と均てん化を図る。
2. 岡山大学、連携大学、協力組織が協力して、以下の医療支援歯学教育コースワークを順次開始、連携大学の教員FDや学生交流に解放、提供する。
 - ①生活習慣病予防と歯科、急性期歯科医療、在宅介護歯科医療に関する講義シリーズ
 - ②要介護高齢者を模したシミュレーター演習や老人介護・在宅介護施設を用いたPBL演習
 - ③岡山大学病院周術期管理センターを利用した高度医療支援・周術期口腔機能管理実習
 - ④臨床講師等を利用した在宅介護・訪問歯科診療参加型学外臨床実習
3. 各連携大学に、特徴ある有病者・高齢者・在宅介護・災害対応に関する医療支援歯学教育プログラムを設置、相互利用を行う。
4. 各連携大学の学部教育に、同様な医療支援歯学教育コースワークを組み入れる努力を

する。

5. 各連携大学の卒後臨床研修制度に、急性期、回復期、維持期、在宅介護現場をサポートする多職種連携医療に対応したコースワークを設置する。
6. 一部の連携大学の大学院に、高齢者の「食」を基盤とした健康増進、介護予防、虚弱予防を目指した疫学研究の推進を可能とする医療支援歯学研究コース（仮称）を設置する。

採択直後、2014年9月27日に、「歯学教育改革コンソーシアム設立記念シンポジウム」を岡山大学歯学部で開催し、100名以上の参加者が全国の連携大学・協力施設等から集いました。2015年2月13, 14日には岡山大学歯学部および岡山大学創立五十周年記念館で「健康長寿を担う歯科医学教育改革 キックオフシンポジウム」を開催し、計200名の参加者が全国の連携大学・協力施設等から集いました。講演はe-learning用に収録され、今後各大学の教育で生かすべくカリキュラム構築がなされていく予定です。

2015年2月には本教育プログラム事業専任で武田宏明・杉本恭子両特任助教が就任しました。両特任助教が実務を統括しながら、本事業を強力に進めていくこととなります。

本事業は日本の歯学教育改革を岡山大学が主導して進めていく大変栄誉あるものであり、採択は大変喜ばしいものである一方、岡山大学歯学部の力が試されるものでもあります。真に日本において存在感を示し得る学部になるか、あるいはそうでないかの岐路に立ったとも捉えることができます。本事業では多くの教育改革において岡山大学構成員皆様のご協力が必要です。本事業を成功させ、本学歯学部が真に日本の歯科医学改革に貢献し国民の健康長寿社会に貢献する立場となれますよう、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

(曾我 賢彦、村田 尚道)

「着任のご挨拶」



医療教育統合開発センター 歯科医学教育改革部門
武田宏明

平成27年2月より医療教育統合開発センター歯科医学教育改革部門特任助教に就任致しました武田宏明です。この場を借りて皆様にご挨拶申し上げます。

私は岡山大学歯学部を卒業後（24期生）、岡山大学病院卒後臨床研修センターにて研修を修了し、総合歯科学分野に大学院生として入局させて頂きました。臨床については、鳥井康弘教授をはじめ、総合歯科の指導医の先生方に、ご指導を受けながら、一般歯科診療を行ってきました。研究については、生体材料学分野（旧：歯科理工学）で鈴木一臣教授のご指導を受けながら、ボンディング材の研究を行い、鈴木教授のご退官後は、現教授の松本卓也教授のもとで、唾液腺の研究を行い、幅広く多くのことを学ばせて頂きました。診療、研究ともに大変充実した大学院生活を送ることができました。卒業後は、総合歯科の医員として、研修医指導の手伝いをさせて頂いておりましたが、この度、新たに設置されました医療教育統合開発センター歯科医学教育改革部門の特任助教に就任させて頂くことになりました。

本部門は、窪木拓男歯学部長のご説明にもあるように、文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラム選定事業を推進する部門となります。これまで他大学の先生となかなか話す機会もありませんでしたが、この仕事をする中で、連携大学の先生方と接する機会が増え、非常に刺激的な毎日を送っております。入ってくるメールも今までの10倍以上に増え、時にはこんな新人が、他大学の教授陣に催促メールを送って良いものだろうか、悩みながらも何とか仕事をこなす日々です。早く仕事に慣れて、もっとスピーディーでスマートな仕事をしなければならないと思う次第です。

未熟な私ではありますが、歯科医学教育を改革するという大きな仕事に携わることができ、その責任感と充実感を感じながら、日々研鑽に励みたいと思っております。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」



医療教育統合開発センター 歯科医学教育改革部門
杉本 恭子

2015年2月1日より、岡山大学医療教育統合開発センター歯科医学教育改革部門の特任助教に着任いたしました、杉本恭子と申します。ご挨拶とともに簡単ではありますが、自己紹介をさせていただきます。私は、岡山大学歯学部（24期生）を卒業後、岡山大学病院卒後臨床研修センターにて研修医を修了し、咬合・有床義歯補綴学分野に大学院生として入局させていただきました。「じっくり研究に取り組みたい。」という思いを胸に皆木先生の下で4年間学ばせていただきました。

大学院時代は、「咀嚼能率の新しい評価法」という研究テーマに取り組んできました。これまでの咀嚼能率評価法は、グミゼリーや色変わりチューインガム等の人工食品を用いる方法が主でしたが、高齢者を対象とした場合には、これらの人工食品の使用が困難な場合も多く、日常的に口にする食品を用いて咀嚼能率を評価する方法を確立できないだろうか、との発想から試行錯誤を重ねて研究を進めてきました。咀嚼後の食塊処理および画像撮影の工夫により、自然食品を被験食として咀嚼能率の評価を行う方法を考案し、国内外で発表する機会もいただきました。御指導いただきました皆木先生をはじめ、多くの先生方に心から感謝しております。現在は、本評価法の原理をもとに企業と共同開発を行った装置を用いて、他大学と共同で咀嚼能率評価に関する研究を進めている段階です。今後は要介護高齢者の咀嚼能率に応じた食形態の決定基準を考案すべく、後輩達が引き継いで研究を進めてくれています。

今回新たに設置されました医療教育統合開発センター歯科医学教育改革部門は、文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラム選定事業の推進を目的として作られた部門です。歯学部の学生および研修医向けの教育プログラムの再構築を進めていくことになり、今後は教える立場になるということの重責をひしと感じております。歯科医師としてのキャリアは6年と短いですが、逆に学生に近い目線での教育もできるのではないかと考えております。

未熟ではございますが、精一杯務めさせていただき所存でございますので、今後とも御指導・御鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

「IADR (Boston) において Distinguished Scientist Award を受賞して」

歯学部先端領域研究センター長
滝川 正春

2015年3月11-14日に米国ボストンで開催された国際歯科研究学会 (IADR: International Association for Dental Research) にて, Distinguished Scientist Award (Research in Oral Biology Award) を受賞してきましたので、ご報告致します。

皆さんご存じのとおり、IADR では、Distinguished Scientist Award という賞を設け、研究上顕著な貢献のあった研究者を対象に毎年次大会の初日の夕刻の Opening Ceremonies の際に授賞式を行っています。今回、この賞の Oral Biology 部門の賞を受賞して参りました。私の研究は、(狭義の) 歯学研究というよりは軟骨・骨代謝、血管新生、CCN ファミリー研究等 life science 全般に亘る研究で、IADR の年次大会にも 2,3 年に一回程度しか参加しておらず、それも演題一題出すだけで、おまけに論文も JDR のような歯学関係の雑誌への投稿数は少なく、IADR にあまり貢献していないと思っていた私には驚きの受賞でした。しかし、IADR が、私のこれまでの研究活動を歯学領域の研究活動として高く評価してくださったことに IADR の懐の深さを感じるとともに、歯学研究者として自分が信条としていた広く医学・生命科学に貢献するという方向性が間違っていなかったと意を強くしています。



今回の受賞は、岡大歯学部では村山洋二名誉教授が Basic Research in Periodontal Disease 部門で受賞されて以来の 2 人目の受賞だと聞いており、私にとっても、また、私を支えてくださった岡山大学歯学部の皆様にとっても励みとなる荣誉ある受賞だと思っています。今後、岡大歯学部の後進の方々から数多くの受賞者が出ることを祈ってやみません。

「着任のご挨拶」



歯学教育・国際交流推進センター

前田あずさ

岡山大学のみなさま、こんにちは。平成 27 年 3 月 1 日より、歯学教育・国際交流推進センターの助教の職を拝命いたしました前田あずさと申します。前号の『歯学だより』では海外便りのページに寄稿いたしましたが、今年度は着任のご挨拶をする機会を頂くこととなりました。

初めての方もおられますので簡単に自己紹介をいたしますと、私が初めて岡山大学にやってきたのは平成 17 年の春に長崎大学歯学部を卒業後、顎口腔機能制御学分野(現在のインプラント再生補綴学分野)の大学院生としてでした。大学院の研究では口腔生化学の当時の滝川教室にもお世話になり、学位取得後は約 1 年間大学病院に勤務したのち、昨年 12 月まで約 5 年間、アメリカの国立衛生研究所(National Institutes of Health: NIH)でポスドクとして留学生活を送っておりました。そしてこの度、縁あって再び岡山大学のお世話になることになったわけですが、このような形で生まれ育った岡山に戻ってくる機会を得られたことを嬉しく思うとともに、周囲の協力と理解、恵まれた環境に大変感謝しております。この場を借りてお礼申し上げます。

歯学部に新しく設置された「歯学教育・国際交流推進センター」では周術期管理を始めとする医科歯科連携、在宅介護等の地域医療、国際交流というこれからの歯学教育において重要な分野を担当していくわけですが、その中でも特に私が注目したのが国際交流の推進です。昨今、若者の間で海外留学が敬遠される傾向にあると世間では言われておりますが、自らの留学生活を通して国際社会に触れることの大切さを認識し、将来的に少しでもその手助けができればと留学中より思っておりました。それは決して海外の方が優れているからということではなく、例えば日本の利点・欠点を発見したり、自分と同じ境遇の人が海外ではどのような意識をもっているかを直に知ることであったり、国内外での人脈を広げることであったりと、日本から離れたからこそわかること、経験できることがたくさんあると実感したからです。本学歯学部には既に ODAPUS という素晴らしい制度がありますが、それを礎として国際交流の輪をますます発展させ、世界に通用する人材育成に少しでも尽力していきたいと思っています。また、超高齢社会を迎えた日本において重要な役割

を担っている医科歯科連携，地域医療にも精通した歯科医師を育てることは，医療全体における歯科の存在意義を高めるためにも非常に重要なことだと認識しております．そのような歯学教育の現場に携わることとなり，私自身もまだまだ勉強中の身ではございますが，微力ながらも歯科医療の未来に貢献できるよう邁進してまいりますので，今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます．



写真1：海岸



写真2：鬼岳



写真3：堂崎天主堂

<長崎の五島列島の福江島の写真1～3は武田宏明先生 提供>



「着任のご挨拶」

歯学教育・国際交流推進センター

園井 教裕

平成 27 年 4 月 1 日から岡山大学歯学部 歯学教育・国際交流推進センター助教として着任致しました，園井 教裕と申します。この場をお借りしまして，皆様方にご挨拶申し上げます。

私は平成 16 年に岡山大学歯学部を卒業後，岡山大学大学院医歯学総合研究科（現：医歯薬学総合研究科）歯周病態学分野に大学院生として入局し，高柴正悟教授及び前田博史先生（現：大阪歯科大学 口腔治療学講座 教授）をはじめとする先生方のご指導の下で研究活動をさせて頂きました。大学院修了後は医員を経て，平成 22 年 4 月からは群馬県草津町にある国立ハンセン病療養所栗生楽泉園で勤務して参りました。

栗生楽泉園では，歯科治療だけでなく，NST（栄養サポートチーム）及び ICT（感染対策チーム）の責任者として，園内の医療向上に努めてきました。その中で学んだことの 1 つに「多職種連携の重要性」があります。

医療の中で，歯科医師はおろか，医師も全てを担える訳でなく，多職種がお互いに強い部分を活かすことで，より良い医療が提供出来ると考えております。しかしながら，そのためには，お互いの職種を理解することが前提となります。

ところが，栗生楽泉園に赴任するまでは，医科主管のカンファレンスへの参加経験が岡山大学病院ではあったものの，限られた職種としか医療活動をしたことがありませんでした。多職種と触れ合い，チームを作り上げていく中で，私自身も勉強させて頂くことが凄く多かったです。一方で，歯科のある病院が少ないこともあるのか，歯科がチーム医療に参画するという概念が園内に必ずしも浸透していた訳では無く，この流れを園内外で変えたいという一心で活動して参りました。こういった考え方の基礎は，歯学部を卒業してから在籍させて頂いた歯周病態学分野にて培われものであると考えております。

本邦ではご存じの通り，医科と歯科とが別々に歩んで来た歴史があり，歯科が医科での全身的な治療に貢献するという流れは全国的に見てもまだまだと思いません。しかし，この流れが大きくなれば，歯科治療の価値はもっと高まると思えます。それは患者さんにとっても大きな利益になることは間違いないと思えます。私は臨床面では主に医療支援歯科治療部で勤務させて頂いていますが，そういったことが広められるように頑張っていければと思っております。

最後になりますが，今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう，何卒宜しくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」



歯学教育・国際交流推進センター
川瀬 明子

平成27年4月より歯学教育・国際交流推進センターの助教として着任いたしました川瀬明子と申します。この場をお借りしまして皆様にご挨拶申し上げます。

私は、平成21年に徳島大学を卒業後、岡山大学病院卒後臨床研修センターにて研修医を修了し、歯科麻酔・特別支援歯学分野の大学院に進学しました。大学院では、宮脇教授のご指導のもと、同期や先輩、諸先生方に恵まれ充実した4年間を送ることができました。

大学院修了後は医員として働いていましたが、昨年7月からこの3月まで出産・育児休暇をいただいていた。この度、復職するにあたり、窪木歯学部長、宮脇教授をはじめ、多くの先生方に温かいご支援をいただき、身に余る役職で復帰することができました。心より感謝申し上げます。

日本社会においても国際的な競争にさらされる時代になってまいりました。この国際化の流れが岡山大学歯学部にも着実に押し寄せてきていることを、当センターの創設からも実感しています。これまで国際交流の分野において、窪木歯学部長をはじめ、多くの先生方が並々ならぬご尽力をされてきたことに思いをめぐらすと、経験不足で英語力にも乏しい私がどれほどお役に立てるか正直不安でいっぱいです。微力ではございますが、できることから精一杯頑張り、少しでも貢献できるようになりたいと思っています。

また、これまでは大学院生という立場でもあり、ほとんど学部生と接することがありませんでした。これからは、主に臨床実習において学生の教育にも携わらせて頂けることになり、とてもやりがいを感じています。岡山大学のトップレベルの臨床実習が、学生にとってはより充実した、また患者さんや社会からはよりわかりやすく評価されるものとなるよう、サポートの一翼を担っていければと思っています。

私にとりましては、このような大役はすべてが挑戦で、力不足で、不安でいっぱいですが、研修医時代からこれまで温かくご指導いただきました諸先生方への感謝を胸に、日々の仕事に精一杯取り組んで参りたいと考えています。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

「ハイフォン医科薬科大学と共同でベトナムに国際歯科センターを開設」

ハイフォン医科薬科大学歯学部 講師
中島 隆

岡山大学の皆さま、こんにちは。2014年4月から、ベトナム社会主義共和国へ赴任している平成20年度岡山大学歯学部卒業の中島隆です。

私は、ベトナム北部の首都ハノイから東に100Kmに位置するハイフォンに滞在しています。ハイフォンは、工業・港湾都市で、郊外には世界遺産であるハロン湾がゆったりと広がっています。ホーチミン、ハノイに次ぐ人口約200万人のベトナム第3の都市で、市中は、人とバイクの喧騒があふれ、無数にある市場にインドシナの肥沃な大地で育った色とりどりの豊富な食材が並ぶ、活みなぎる街です。



海の桂林と呼ばれる景勝地ハロン湾

現在、ベトナムを含むASEAN諸国は、国際社会の大きなうねりの渦中にあります。急激な人口増加により域内人口は7億人に迫るとともに、著しい経済発展とその旺盛なインフラニーズから、世界各国が有望な投資先として熱視線を向けています。

また、2015年ASEAN統合では、域内関税、投資、人の流れなどを自由化し東南アジア各国が協力して国際競争力を高め、更に力強い経済発展が確実視されています。医療系分野に関わる点として、医師・歯科医師・看護師などの職業資格を国家間で相互承認する予定になっています。



オープニングセレモニーの様子

人口減少局面に入った日本とは真逆の局面に差し掛かっています。チャンスがないはずがない、肌で感じています。

岡山大学歯学部とハイフォン医科薬科大学歯学部は、学部間交流協定を締結しており、様々な共同事業を行っています。その一事業として当地に日本人歯科医師が常駐する歯科診療室を開設することとなりました。



ベトナム人学生に囲まれベトナム人患者の診療

本診療室は、「ハイフォン国際歯科センター」と命名し、日本人歯科医師による日本水準の歯科治療を提供しています。日本企業の進出に伴い増加している在住邦人患者、および高水準の歯科治療を望む現地患者を広く受け入れる国際歯科医療拠点として機能するとともに、ハイフォン医薬大学等の歯科医師や学生の、教育や研究指導を行っています。これらを通じ、ベトナム北部地域の歯科医療水準および公衆衛生の向上に寄与することを目的としています。また、開設にあたり、日本の歯科医療機器メーカーから多面的な支援を頂いており、産学官が協力して日本の高度な歯科医療を輸出するモデルになることを期待しています。

本診療室が、海外歯科医療拠点の一つとして今後ますます発展していくとともに、日本国と東南アジア諸国の、相互理解、友好関係の強化の礎になるよう精進してまいります。本紙では、語り尽くせぬ（語れない？）経験を多くしています。ご興味のある方は一度、当地を訪れていただければ幸いです。ぜひ、ご連絡（gmd422087@s.okayama-u.ac.jp）をお待ちしております。



ハイフォン医科薬科大学 医局員と共に

「就任のご挨拶」



歯科薬理学分野

小崎 健一

平成 26 年 4 月 1 日付けで歯科薬理学分野 教授を拝命致しましたので、本誌面にて謹んでご挨拶を申し上げます。私は広島大学 歯学部出身で、前任の故 北山滋雄 教授は同窓の先輩に当たり、学部生の時には薬理学実習にてご指導戴いた事を覚えています。

平成元年に広島大学 歯学部を卒業後、名古屋大学 医学部 口腔外科学講座 金田敏郎 教授(現在は名古屋大学 名誉教授)のご指導の下で同附属病院 医員ならびに同大学院博士課程の大学院生として歯科・口腔外科臨床の研鑽を積みながら、松山睦司 教授(当時)が主宰される同大学 医学部 病理学第 2 講座で研究の道へと足を踏み入れました。当時の私は、病棟勤務時に悪性エナメル上皮腫の肺転移症例を経験した事で、癌転移という生命現象に興味を持っていました。一方で、現代の癌治療では救命できない臨床の限界を感じつつ、研究三昧の院生生活を送っていたのですが、お世話になった病理学第 2 講座の気風が誠に自由かつ健全であった事から、気が付いた時にはドブプリと癌研究に浸っていました。

平成 6 年の大学院満了後は、松山教授と高橋雅英 助手(現在は名古屋大学大学院医学系研究科・医学部医学科 教授、名古屋大学 医学部長)のご推挙により、愛知県がんセンター研究所 研究員として赴任し、研究一本で勝負する機会に恵まれました。同研究所では、病態学研究室 清水 暁 室長(当時)や高橋利忠 研究所副所長(現在は愛知県がんセンター 名誉総長)らから薫陶を賜りながら、同研究所 分子腫瘍学部 高橋 隆 部長(現在は名古屋大学大学院医学系研究科 教授)の肺癌研究グループにて世界初のヒト肺癌リンパ行性転移モデル系の構築に成功しました。さらに、その網羅的発現解析等から、炎症性細胞を擬する分子シグナルが肺癌の浸潤・転移に重要な分子機序である事、炎症性シグナルでキーとなる COX-2 等の分子群が癌転移抑制の分子標的となりうる事等を明らかにしました。

平成 13 年から愛知医科大学 医学部 助手、平成 16 年から大阪歯科大学 講師、そして平

成 17 年から東京医科歯科大学 硬組織疾患ゲノムセンター 特任助教授、平成 22 年からは同大学 難治疾患研究所 准教授として、共同研究者の方々に支えられながら、指導する大学院生諸君らとともに多くの研究成果を上げてきました。特に、同研究所 分子細胞遺伝分野 稲澤譲治 教授の研究グループにて開始した microRNA (miRNA) 研究では、癌組織で特異的に生じる DNA メチル化異常により発現抑制される癌抑制遺伝子型 miRNA (TS-miRNA) を世界に先駆けて報告するとともに、口腔扁平上皮癌や肝細胞癌、子宮体癌等に対する TS-miRNA による癌 miRNA 創薬の可能性を明らかにしました。さらに、近年は、field cancerization (広域発癌) という観点から、解剖学的に連続する領域である口腔ならびに食道における扁平上皮癌を対象としたトランスレーショナルリサーチの推進にも尽力してきました。

歴史と伝統ある岡山大学に着任し、早や 1 年が経とうとしています。着任後わずか 1 ヶ月で病を得て、公私とも儘ならぬ 1 年でありましたが、岡山大学内外の多くの先生方から温かいお力添えを賜りつつ、職務に当たっています。今後は、患者としての実体験をも得難い教育資源として、教育・臨床・研究を担う次世代の指導者の育成と癌個別化医療の実現を目指したトランスレーショナル・リサーチの推進に力を尽くす所存ですので、皆様には何卒ご指導ご鞭撻を賜ります様、宜しくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」



生体材料学分野

岡田正弘

2014年6月1日付けで生体材料学分野の准教授に着任いたしました、岡田正弘と申します。この場を借りて皆様に自己紹介とご挨拶を申し上げます。

ナノテクノロジーという用語は1974年に谷口紀男によって提唱され、この用語が一般に知られるようになったエリック・ドレクスラーの著書『創造する機械（1986年）』において生命科学や医療分野への革命的な応用が予言されています。私自身がナノテクノロジーという用語に出会ったのは、中学生の時に読んだSFで、例えば、ナノマシンによる損傷組織の修復や、記憶のバックアップのための埋込型メモリなど、ワクワクする未来に胸を躍らせておりました。

このような背景で私は工学部へ進み、2004年に神戸大学大学院・自然科学研究科を修了して博士（工学）の学位を取得しました。その際、高分子合成化学を基礎としたナノスケールでの材料設計と評価方法について学びました。学位取得後は、国立循環器病センター研究所・生体工学部において2010年までポスドクを勤め、ナノテクノロジーの医療応用を目指して研究を行ってきました。具体的には、バイオセラミックス（特に、ハイドロキシアパタイト）からなるナノ粒子の形態、結晶性、分散性などの制御法を開発し、生体接着性コーティング材、界面活性材、ナノ多孔体への応用展開を行っております。その後、2010年に大阪歯科大学・歯科理工学講座の助教に採用され、歯科生体材料への応用展開とともに材料化学を基盤とした歯学教育に精進してまいりました。現在は、松本卓也教授のご指導のもと Material-Based Biology の概念を学びながら、生体内におけるナノ構造体の形成メカニズムの解明を通じて新しい材料の設計手法の確立を目指して研究を進めております。

まだまだ未熟な私ではありますが、今後も研究と教育に精進するのはもちろんのこと、若手研究者の育成やこれまで培ってきたネットワークを生かしての医工連携など、少しでも皆様のお役に立つように微力ながら尽力いたしますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」



予防歯科学分野

入江 浩一郎

平成 27 年 4 月 1 日付けで、岡山大学病院予防歯科の講師として着任いたしました 入江浩一郎と申します。この場をお借りして、皆様にご挨拶を申し上げます。

私は、21 期生として岡山大学歯学部を卒業後、卒後臨床研修を京都大学医学部附属病院歯科口腔外科にて修了後、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科予防歯科学分野の大学院として進学しました。大学院を卒業後は、岡山大学病院予防歯科の医員を経て、米国シアトルにありますワシントン大学歯学部歯周病学講座にて研究留学後、愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座の講師を経て、現在に至ります。

大学院時代は、森田教授を始めアグレッシブな上司からのご指導のもと、自由な環境での研究計画の立案から研究費の獲得方法、研究成果の国際学会での発表そして、英語論文採択という一連の流れを体験させていただき、現在の仕事に対する考え方や姿勢を植え付けていただきました。20 代という多感な時期に多くの優秀な先輩から教を請うことが出来たのは人生の財産だと思っています。今後の仕事として、口腔疾患、特に歯周病は口腔内の環境が原因だけでなく、間接的に多くのリスクファクターが存在することがわかってきました。すべての人の口腔内を健康にするという大きな目標を掲げ、環境的、経済的、社会的、行動的原因によって生じる口腔の健康に対するリスクファクターを軽減できることを目的に研究面では取り組んでいきたいと思っています。

岡山大学歯学部は、他大学の先生から、国試の合格率が高いことで有名です。どういう教育を受けてきたのかとよく聞かれます。明確な答えは難しいですが、私立大学で行われているような、国試対策一辺倒の講義が中心ではなく、学部教育でのチュートリアルや研究室配属、最新の研究の講義、そして一診での実践的な臨床教育、それらが根底にあるのではと思います。つまり岡山大学歯学部は、問題解決能力の高い歯科医師を多く輩出しているのではと思います。

この度、再び岡山大学歯学部赶赴することができ、今度は、後輩の方々に大学院やアメリカでの経験を、自分なりの形を通じて指導をしていきたいと考えています。自分の母校を誇れる後輩が増えるように、教育・研究・臨床を頑張っていく所存であります。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」



インプラント再生補綴学分野

三野卓哉

平成 26 年 5 月より大学院医歯薬学総合研究科インプラント再生補綴学分野の助教に着任いたしました三野卓哉です。この場をお借りし、自己紹介を兼ねて皆様にご挨拶申し上げます。私は愛知学院大学歯学部を平成 19 年に卒業後、岡山大学病院卒後臨床研修センター歯科研修部門にて臨床研修を修了し、インプラント再生補綴学分野（旧第一補綴科）に大学院生として入局させていただきました。大学院時代の臨床では、歯科補綴学全般に携わらせていただき、特に口腔インプラント治療は、自身の強い興味もあり多くのケースを経験させていただきました。研究においては、「歯科治療に対する不安・恐怖を測定する簡易型フェイススケール質問票の新規開発」というタイトルで学位を取得させていただきました。その他にも多くの臨床疫学や臨床研究に携わらせていただき、充実した大学院生活を送ることができました。現在、岡山大学病院は臨床研究中核病院に指定されたこともあり、臨床研究の重要性は高まってきております。当医局の臨床疫学チームの一員として、期待に応えられるように努力いたします。大学院卒業後は、医局関連のクリニックの歯科責任者として主に臨床に従事させていただきました。そちらでは、一般歯科に加えて介護施設への訪問歯科等も行っていったことから、高齢者歯科の重要性を強く感じ、それが摂食嚥下リハビリテーション学や栄養学を詳しく勉強するきっかけともなりました。その後、大学に教員として招いていただきました。現在はこれまでの「研究」「臨床」に加え、「教育」にも携わらせていただき、自身の非力さを日々痛感しながらも「教育」にやりがいを感じているところです。特に基礎実習ではライター長をさせていただくこととなり、他大学出身者であることをプラスに捉えて、内容を新しくアップデートしようと奮闘しております。また、臨床実習では、歯科診療の面白さや魅力を何とか学生に伝えたいと日々努力しているところです。未熟な私ではありますが、今後も臨床、教育、研究等に精進するのはもちろんのこと、人との繋がりを大切にしながら日々研鑽を積みたいと思っております。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。最後に、大学院時代からご指導くださった窪木拓男教授、大野彩先生、ならびに臨床・研究・教育と日々ご指導いただいたインプラント再生補綴学分野の先生方に深く感謝申し上げます。

「着任のご挨拶」

咬合・有床義歯補綴学分野

荒木 大介

この度、平成 26 年 4 月より咬合・有床義歯補綴学分野の助教に着任いたしました。この場をお借りして、ご挨拶申し上げます。

私は岡山大学歯学部を卒業後（24 期生）、岡山大学病院卒後臨床研修センターにて研修医を修了し、咬合・有床義歯補綴学分野の大学院に進学しました。幸いに岡山大学は大学院に進学する人が多く、在学中は同期と切磋琢磨して、楽しく臨床や研究に取り組むことができました。

研究に関しては、当講座の諸先輩方から続く義歯床下粘膜の病理学的変化の延長ということで、ラット歯肉線維芽細胞に周期的圧縮刺激を負荷し、細胞レベルでの変化を生化学的に解析する研究に従事しております。生化学的な知識・研究ができたのも、学部生から口腔生化学分野での御指導の賜物であり、感謝の気持ちは言葉に余るほどです。

臨床に関しては、補綴治療の中でも全部床義歯が特に好きで様々な勉強会にも参加しております。まだまだ技術は未熟で悩むことも多々ありますが、私が全部床義歯に興味をもつきっかけを与えてくれた当講座の原 哲也准教授の臨床実習での指導を忘れずに日々診療をしております。私は正直、学生時代の成績は良い方ではなく、各科の先生方にご迷惑をおかけして何とか卒業できましたが、あのとき指導していただいた経験は今も忘れることなく多くのことが今の臨床に役立っています。学生や研修医に何か残るような知識や経験を伝えられればと思います。

まだまだ未熟で至らない点が多いと思います。今後とも皆様のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



「着任のご挨拶」



歯科矯正学分野
星島光博

2015年8月1日付けで岡山大学大学院医歯薬学総合研究科・歯科矯正学分野の助教として着任いたしました星島光博と申します。この場をお借りしまして、皆様にご挨拶を兼ね自己紹介をさせていただきます。私は高校卒業まで、地元倉敷にて生まれ育ちました。その後、大学で香川、大学院で奈良、京都の医療メーカーで社会人生活を経て、2004年に岡山大学歯学部学士3期生として編入いたしました。会社を辞めて歯学部への編入を考えたのは、奈良の大学院で骨リモデリングの研究に携わり、歯学部の先生とも共同研究をしていたことと、岡山が好きだったことが影響していると思っています。

歯学部へ編入してからも、分子生物学分野での研究に携わりたいと思い、3年次の研究室配属で滝川正春教授(現先端領域研究センター教授)の口腔生化学講座(当時)を希望しました。以来、一診や研修医等を経つつ、足掛けで10年間、軟骨におけるCCNファミリーの機能解析をテーマとし、研究を行ってきました。研究の成果は、国内外多数の学会等で発表させて頂き、本当に貴重な経験をすることができました。ご指導頂いた多くの先生方に、心から感謝しております。今後も学んできた知識や専門技術を生かし、さらなる研究を進める所存です。

また、私が矯正歯科を志したのは、骨のリモデリングに興味があったことが一つの要因です。歯が骨の中を動き、みるみる治療が進んでいく過程に感動しつつ、毎日の診療を行っています。現在は、自分の診療や研究だけでなく、教育や指導へも携わる立場となりましたが、矯正歯科医としても研究者としてもまだ半人前にも満たず、学ぶべきことが数多くあることを日々実感しています。初心を忘れず、そして社会に貢献できるようこれからも邁進していきたいと思っております。今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

歯科矯正学分野

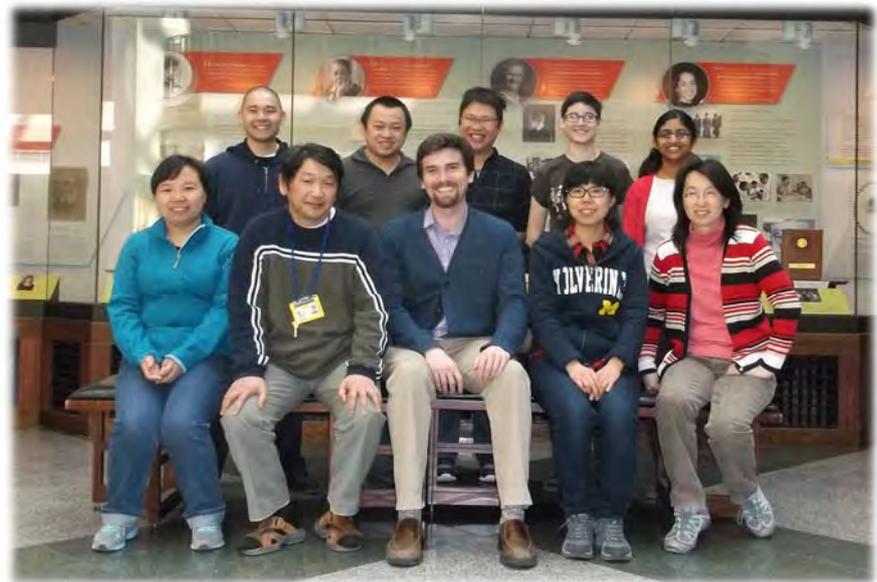
早野暁

2015年3月1日から歯科矯正学分野の助教に着任させて頂きました早野暁と申します。ご挨拶を兼ねて自己紹介をさせて頂きたいと存じます。

私は2006年に21期生として岡山大学歯学部を卒業し、岡山大学病院卒後臨床研修センターで1年間の研修を経たのち岡山大学大学院歯科矯正学分野に入局しました。大学院時代は、私の指導教官であった山城隆教授（現在、大阪大学大学院歯学研究科教授）をはじめ多くの先生方の指導の下、象牙芽細胞の分化に着目した歯の発生についての研究に従事させて頂き、この研究結果を2011年にSan Diegoにて開催されたIADR/ Unilever Hatton Competition and Awardsで発表させて頂きました。発表を終えた夜、レセプションパーティーで様々な国から参加した同世代の研究者と（僕の拙い英語ではありますが）話し、彼らから刺激を受け、海外留学をしたいと思うようになりました。

折好く岡山大学大学院医歯薬学総合研究科International Training Program of Okayama University (ITP)から留学援助プログラムの募集がある事を知り、このプログラムを利用して2013年1月からUniversity of Michigan, School of Dentistry, Department of Biologic and Material Sciencesの三品裕司先生の研究室へ留学しました。ここではBone Morphogenetic Protein (BMP) signalingが頭蓋顔面の発生に与える影響について研究し、先日研究結果を論文として発表することが出来ました。2年間と短い期間ではありましたが、本当に貴重な経験をさせて頂くことが出来ました。ご指導頂いた多くの先生方、留学をサポートしていただいたITPの先生方に心から感謝致します。

今後は岡山大学職員として臨床・教育・研究に従事し、微力では御座いますが岡山大学に貢献できるよう努めていきたいと考えております。まだまだ若輩者ですが、今後ともより一層のご指導ご鞭撻の程何卒よろしくお願い申し上げます。



Dr. Mishina lab グループ写真



「着任のご挨拶」

歯周病態学分野

小林 寛也

平成26年11月より大学院医歯薬学総合研究科歯周病態学分野の助教に着任いたしました小林寛也です。この場をお借りして皆様にご挨拶申し上げます。

私は岡山大学歯学部を平成19年に卒業後（22期生）、岡山大学病院卒後臨床研修センターにて研修医を修了し、歯周病態学分野に大学院生として入局しました。大学院時代には、旧第二保存科時代から脈々と受け継がれている『品位と威厳』という基本姿勢のもと、科学者としての心構えと論理に基づいた思考を学ぶ機会を与えていただきました。基礎研究として、可溶性インターロイキン-6受容体の産生メカニズムの解明という命題と向き合い、高柴正悟教授ならびに大森一弘講師に御指導いただきながら学位を取得しました。

その後、1年間医局の関連病院である万成病院で常勤歯科医師として勤務したのちに、ご縁があって徳島大学病院糖尿病対策センターに学術研究員として赴任しました。センター長である船木真理教授の御指導のもと、『細胞環境の物理的性質による細胞機能への影響の解析』や『糖代謝異常に対する予知マーカー樹立を目指した前向きコホート研究』といった内容で基礎的研究・トランスレーショナル研究を行ってきました。人生で初めて岡山県外で生活することになり、30歳を過ぎてホームシックというものを経験しましたが、医科領域での研究生生活は常に新しい発見の連続であり、1年半という短い期間ではありましたが、糖尿病、肥満症や脂質代謝異常といった疾患と向き合いながら、刺激的な毎日を過ごさせていただきました。

昨年11月から歯周病態学分野に着任し、研究のみならず臨床、そして教育に従事するようになりました。まだまだ未熟なところばかりで、教えること以上に教えられることの方が多い日々の中で、これからも多くを吸収し、新しい発見に魅せられながら、大学教員としての責務を果たせるよう邁進していきたいと思っております。今後とも御指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



「着任のご挨拶」

歯周病態学分野

本郷昌一

平成 26 年 4 月 1 日より、歯周病態学分野助教として着任させて頂きました、本郷昌一と申します。簡単ではございますが、自己紹介を兼ねて着任のご挨拶をさせていただきます。

私は、平成 14 年 3 月に岡山県立倉敷青陵高等学校を卒業後、徳島大学歯学部歯学科に入学しました。6 年間の学生生活で、阿波踊りを習得し、徳島ラーメンを食べ、徳島生活を十分に満喫することができました。平成 20 年 3 月に卒業後、帰岡し、岡山大学病院卒後臨床研修センターで研修医として勤務しました。この 1 年間に、多くのことを学びましたが、特に“歯周病”の診断と治療の奥深さに触れることができ、大学院（歯周病態学分野）に進学することを決意しました。大学院での 4 年間は、研究と臨床にじっくりと研鑽を積むのと同時に、社会人としての基礎を学ぶことができたと思います。また、研究では、“歯と歯肉上皮の接着”の研究を行い、歯周組織に関する学識を深めることができました。大学院修了後、平成 25 年 4 月から、国立療養所大島青松園厚生労働技官として勤務し、現在に至ります。

“臨床と研究”に“教育”が加わった昨年からは、初めてのことが多く、不慣れで多くの先生にご迷惑をおかけしたと思います。この場をお借りして、お詫びと御礼申し上げます。学生教育は、教員でなければ関わること少ないため、貴重な経験をさせて頂けていることを実感しながら、日々手探りではありますが、邁進しております。また、臨床では、歯科医師 7 年目と若輩である私に何が出来るかを考え、患者様により良い医療を提供できるように、日々精進しております。

最後になりましたが、今後とも御指導御鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

歯周科
海老沼孝至

平成 27 年 2 月 16 日付で、岡山大学病院助教に着任しました、海老沼孝至と申します。この場をお借りして、皆様にご挨拶ならびに自己紹介をさせていただきます。

私は九州歯科大学を卒業後、香川大学附属病院卒後臨床研修センター研修医となり、歯科口腔外科にて 1 年間、卒後臨床研修を受けました。

研修修了後は岡山大学大学院医歯薬学総合研究科歯周病態学分野に入局し、大学院博士課程の大学院生となり、研究・診療の日々を送りました。造血幹細胞移植患者における *mecA* 保有状況に関する調査研究を行い、高柴正悟教授、現・医療支援歯科治療部の曾我賢彦准教授のご指導の下、国内外の学会及び論文にその成果を発表することができました。ご指導を賜りました先生方に深謝申し上げます。

大学院生時代で特に印象に残った出来事は、やはり平成 23 年に発生した東日本大震災です。当時私は岡山大学病院の災害派遣歯科医師として岩手県の陸前高田市へ行き、歯科医療支援を行いました。津波による想像を絶する破壊の跡が生々しく残る中、復興に邁進する被災者、ボランティアの方々の力強さに心を打たれると共に、日本の底力を感じました。震災後はや 4 年となりましたが、一日も早い完全復興を祈念しております。

大学院修了後の約 2 年間は、岡山大学病院医員として週に数日、大学で診療をしておりましたが、この度助教を拝命することになりました。

私は岡山大学出身でもなく、ましてや岡山大学病院の卒後臨床研修も未経験なため、一診での診療をどのようにしたらよいか戸惑いつつ、先輩教員のご指導の下、試行錯誤しながら学生指導を行っております。まだまだ経験の浅い若輩者ではありますが、学生に対し、ただ単に指導医の方針を鵜呑みにするのではなく、自分自身で調べ、考え、道を切り開いていくような歯科医師になって欲しい、という思いが伝わるような指導をしていきたいと考えております。

最後になりますが、大学教員としての責務を果たしつつ、臨床・研究に励んでいきたいと思っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、お願い申し上げます。

「着任のご挨拶」



歯周病態学分野
富川（山口） 知子

平成 27 年 4 月 1 日から岡山大学大学院医歯薬学総合研究科歯周病態学分野の助教に着任いたしました。約 3 年ぶりとなる岡山の地はとても懐かしく感じます。改めてこの場をお借りしてご挨拶させていただきます。

私は、平成 17 年に岡山大学を卒業後、歯周病態学分野に大学院生として入局しました。ここでは、歯周組織の炎症メカニズムを解明することを目標にして研究・臨床に励んでまいりました。その後は同分野の助教として教育にも携わり、非常に充実した日々を送りました。

平成 25 年、結婚・出産を機に岡山大学を退職し、福岡へと移りました。様々なご縁があり、九州大学病院口腔総合診療科の助教として勤務することとなりました。ここでは研修歯科医を指導する立場となり、改めて教育について学ぶ機会を得ました。教育理論に基づいた指導方法や教育システムの構築・改善などに携わり、指導歯科医としてあるべき姿を理解できたのではないかと思います。他大学での教育方法やシステムが違う環境の中で学ぶべき点も多くありましたが、一方で、岡山大学での学部教育が非常に優れており卒後研修に良い影響を与えていることも実感できました。

この度、再び岡山大学に着任するにあたり、九州大学病院で学んだことを生かしつつ、後輩の育成を通して母校の発展に貢献できればと考えております。また、子育てとの両立を応援し、背中を押していただいた多くの方々に感謝するとともに、同じ女性歯科医師の先生方のお力になれるよう努めていきたいと思っております。

今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

歯周病態学分野

山城 圭介

平成 27 年 4 月より歯周病態学分野の助教に着任いたしました山城圭介です。平成 26 年の 3 月まで同職であったため、出戻り、再登板です。ご存知の方も多いかと思いますが、皆様どうぞよろしく申し上げます。昨年 1 年間は広島市立広島市民病院歯科口腔外科の副部長として勤務しておりました。この科は口腔外科（再建系）の関連病院でもあります。広島市民病院は急性期病院としての任務を担っており、救急医療が専門の一つです。歯科口腔外科においても、外傷による骨折の手術や、急性炎症の消炎処置など、日時を問わない治療が多く見られました。今まで私が対象にしていた歯周治療は慢性期の患者が対象ですので、比較的ゆっくりと治療計画をたて、ゆっくりと治療を進めていくことが多かったのですが、この病院の患者は突然現れ、突然いなくなる（退院、転院する）ことが多かったため、当初は大変面喰らいました。しかし病院歯科の口腔外科が行うべき治療としてこれらとは別に、がん患者に対する「口腔ケア」も大きなウエイトを占めていました。世の中にはこれほどがんの患者がいるのかと思うくらい、私の患者はがん患者ばかりでした。医科からの紹介患者が主だったのでそうなる事は必然かもしれません。周術期という言葉は曾我先生のお陰で岡山大学では大変有名な言葉だと思えます。歯周病の専門家が、口腔内の感染管理が、術後の合併症や、粘膜炎の拡大などを防ぐことができるということを医科の先生方に啓蒙することで、紹介患者は順調に増えました。チーム医療の一旦として、歯科の果たす役割はとても大きいと実感しております。超高齢化社会において、歯科医の果たすべき役割は様々です。全身疾患や、多くの服用薬の知識のみならず、得意な口腔内においても歯や歯肉のみならず、粘膜、舌、咽頭まで病変を見逃さないように気を配りながら日々の診療、学生の教育を行う様研鑽してまいります。これからもよろしくお願い致します。

「着任のご挨拶」



歯科麻酔・特別支援歯学分野

丸濱 美菜子

平成27年4月より歯科麻酔科の助教に着任しました丸濱美菜子と申します。この場を借りて皆様にご挨拶ならびに簡単な自己紹介をさせていただきます。

私は倉敷で生まれ育ち、大学時代は広島で過ごしました。平成19年広島大学を卒業後、岡山大学卒後臨床研修センターで1年間研修を行いました。その後、患者の全身状態をきちんと評価できる歯科医師になりたいという思いと、自分自身が手術を受けた際に優しい麻酔科医に出会った経験から麻酔に興味をもち、歯科麻酔科に大学院生として入局しました。宮脇卓也先生が教授に就任されて初めての大学院生でした。岡山大学病院のスペシャルニーズ歯科センターは患者さんが非常に多く、行動抑制を必要とする場合、静脈内鎮静法や全身麻酔を多く施行していることから、より実践的な歯科麻酔を行うことができるのも魅力の一つでした。大学院時代の研究は、同センターの静脈内鎮静法での抗てんかん薬服用患者に対する静脈麻酔薬であるプロポフォールが必要投与量を非内服患者と比較する臨床研究を行いました。その後は高速液体クロマトグラフィーを用いてプロポフォールの血中濃度測定を進めています。また研究だけでなく、一般歯科診療、医科麻酔研修ならびに国際学会発表の機会をいただき、大変充実した4年間を過ごさせていただきました。大学院卒業後は、医員として3年間臨床及び研究に従事し現在に至ります。

私事ですが、2年前に結婚、1年前に長男を出産しました。医局の人手不足から産後6か月で職場復帰しましたが、仕事と育児の両立は、制度的にも精神的にも想像よりはるかに大変であり、心が折れそうになることも多々あります。しかし、宮脇教授はじめ医局の先生方にご理解ご協力いただき、また家族の支えもあって今このように働く機会をいただけることに日々感謝し、出来る限りの努力を惜しまず任務に務める所存です。まだまだ未熟者ですが、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

口腔形態学分野

内部健太

2015年5月1日付けで口腔形態学分野助教に着任致しました内部健太と申します。ご挨拶とともに簡単ではございますが、自己紹介させていただきます。

私は2005年に20期生として岡山大学歯学部を卒業し、まだ研修医制度の義務化が始まっておりませんでしたので、そのまま顎口腔機能制御学分野（現インプラント再生補綴学分野）に大学院生として入局致しました。と思ったのも束の間、2年目の春からは東京にあります国立成育医療センターへの出向を命じられ、大学院修了までの3年間は現東京医科歯科大学教授の浅原弘嗣先生の研究室で過ごしました。当時は「補綴を勉強したかったのに妙な事になったな」と感じていましたが、このお陰を持ちまして何とか学位を頂けました。その後2009～2012年は補綴科の医員として、2012年2月～2015年4月の3年余りをフィラデルフィア小児病院でポスドクとして修行する機会を得ました。そろそろ帰国を、と考えておりましたところ、有り難いことに山本敏男教授に拾って頂き現在に至ります。

私のこれまでの研究について簡単に紹介させていただきます。大学院では、窪木教授の「発生学に立脚した歯の再生法の確立」という壮大なテーマの一端として、歯の発生に関わる遺伝子の新規探索を行いました。幸いいくつかの遺伝子を発見することができましたが、それだけ、という無責任な状態になっているため、別の研究に携わっている今でもずっと気になっている研究です。なんとか少しでも続きをやる機会があればと考えています。

アメリカに移ってからは、レチノイン酸と骨格形成、ならびに関連疾患をターゲットとして研究してきました。ビタミンAの代謝産物であるレチノイン酸は非常に強力なシグナル分子で、これが過多あるいは欠乏することで生体に様々な影響を及ぼします。また、強力であるが故に様々な病気の治療ターゲットとしても有望です。我々はこれをFOP等における異所性骨化の抑制、成長阻害の改善、大きな骨欠損に対する骨再生、筋組織再生など多くの状況に用いることができるのではないかと考え、研究を行っています。この研究もまだまだやらなければならない事や、やってみたい事が盛り沢山で、投げ出す訳にはいかない状況です。

幸いにも、着任いたしました口腔形態学分野では、歯や骨に関する研究が多く行われているため今後もこれらの研究を発展できるのでは、と考えております。微力ながら歯科医学の発展に貢献できるよう努力していきたいと思っておりますので、今後ともご指導のほどよろしくお願い致します。



Translational Research Program in Pediatric Orthopaedics グループ写真



「着任のご挨拶」

歯周科
伊東 孝

はじめまして、このたび2013年11月1日付けで歯周科・助教に任命されました伊東孝と申します。

岡山大学歯学部を卒業後、岡山大学病院卒後臨床研修センターで1年間の研修医を経て、同大学院を卒業、その後医員を半年経験し、歯周病態学分野・特任助教を1年と、岡山大学での生活も15年目になりました。ここ最近は国内にしながら研究中心の生活を送らせていただいております。

大学院時代は、*Streptococcus mutans* の初期付着に与えるレクチンの影響に関する研究と題して、糖鎖を介した口腔感染症原因菌の初期付着機構の解明およびその初期付着を抑制する天然レクチンを検索することを目的とした研究をしておりました。やや時間はかかりましたが、高柴正悟教授、吉田靖弘先生（当時、生体材料学分野 准教授）のお力添えをいただき形にすることが出来ました。学位取得後は橋渡し研究として実用化に向けた研究開発を中心に行ってきました。今年度で臨床試験も行う計画もあり、ようやく成果として実る段階まで来た感触があります。もちろんこれらの成果は本研究を通じて御支援してくださった企業の方々の存在なくしてはあり得なかったと思います。そういった意味でも「橋渡し」という役割の大切さを思い知らされる毎日です。

高柴教室の門を叩いてまる8年が経過し、多くの諸先輩方のご指導の元、素晴らしい経験をさせて頂いて感謝しております。今後は、これまで経験させて頂いたことを後輩・学生へと「橋渡し」することができればと考えております。今後とも変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶と留学記」

歯周病態学分野

池田 淳史



平成 26 年 11 月から大学院医歯薬学総合研究科歯周病態学分野の助教に着任いたしました池田淳史と申します。この場を借りて皆様にご挨拶申し上げます。この場を借りて皆様にご挨拶申し上げます。

私は岡山大学歯学部を卒業後（23 期生）、岡山大学病院卒後臨床研修センターで研修医を修了し、平成 22 年に歯周病態学分野（旧第二保存科）に大学院生として入局させていただきました。大学院生時代には、歯周治療や根管治療などの歯科診療に加え、医療支援歯科治療部での診療や、外勤先にて特別養護老人ホーム等で往診を行う中で、今

後社会の中で、歯科がどのように関わっていくべきかを勉強させていただきました。また、唾液腺の修復・再生に関する研究を通して、根拠を持って論理的に物事をとらえるという考え方を勉強させていただきました。

助教に着任してからは、学生指導の面でも岡山大学歯学部に関わっていく立場になりました。僕が今まで勉強してきたことを学生に伝えようと努力しましたが、なかなかうまくいかず、今までとはまた別の大変さを実感致しました。平成 27 年 1 月までの 3 ヶ月間という短い期間でしたが、非常に貴重な経験をさせていただきました。

さて、なぜ 3 ヶ月間で助教を退職したかということ、唾液腺に関する研究を行っていた関係から、平成 27 年 2 月からアメリカ合衆国マサチューセッツ州にあるフォーサイス研究所(The Forsyth Institute) に留学させて頂くことが決まったからです（決してクビでは有りません）。決定してから、3 ヶ月程度しかなかったため、とても慌ただしい出国となり、各方面の方々に大変ご迷惑をおかけしました。この場を借りてこころよりお詫び申し上げます。

これを記載している段階で渡米して1ヶ月経ちますが、ようやく暖かくなり雪が解け始めました。今年の積雪量は史上1,2位を争うもので、最高気温が連日氷点下という状態でした。到着当初には、寒さに弱い自分は一体なんて所に来たのだろうと思ったものです。



研究所では、唾液腺に関する研究を少しずつ始めておりますが、全然英語が話せない状

態で渡米したため、研究所のメンバーとコミュニケーションをとるのに悪戦苦闘している毎日です。また、集中して研究に取り組むことができるとても良い環境が用意されているので、留学期間中は英語にも研究にもどっぷりつかってみようと考えております。

そして、こちらでしっかり成果を出して、日本に帰ってからは、この留学経験を「すごく良かったよ」と言って、岡山大学の後進に伝えていけたらと思います。最後に岡山大学歯学部及び関係者の皆様の益々の発展を祈念致しまして、簡単ではございますが着任の挨拶と近況報告とさせていただきます。



「転出のご挨拶」

松本歯科大学 歯科薬理学講座
十川紀夫

岡山大学歯学部の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。平成27年1月1日付けで、松本歯科大学歯科薬理学講座教授を拝命し、過日赴任致しました。岡山大学歯学部ならびに大学院医歯薬学総合研究科在籍・在職中は、多くの方々にお世話になりました。皆様から頂戴致しましたこれまでのご指導、ご支援に対し、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

さて、赴任してから3か月が経ち、周りの方々のご協力のもと、徐々にではありますが教育、研究の両面で新任地での仕事も立ち上がって参りました。『薬を制する者は医療を制す。』との思い込みから大学院で歯科薬理学を専攻し、研究者としてのキャリアを開始してから30年。現在、研究対象は“摂食調節”へとシフトしておりますが、当初出会った「ヒスタミン」とのくされ縁はなかなか断ち切れず、こちらでも、ヒスタミン受容体（特にH3受容体）が関わるモノアミントランスポーターの制御機構をトランスポーターの発現および機能の両面から検討しようと準備を進めております。

岡山生まれで岡山育ち、幼稚園から大学・大学院、就職まで条件的に選択し得る最も近い場所で過ごしてきた私にとって、10年間という永きに予定された岡山県外在住は初体験であり、不安な面も多々ありますが、これまで他大学に転出された先生方と同様、新任地で岡山大学在学・在職中に学ばせていただきましたものを花開かせていければと考えております。

ところで、現在、私も日々勉強中の身ではありますが、松本歯科大学がある塩尻はワイン作りが盛んであり、また、日本を代表する景勝地である上高地を初めとして豊富な観光スポットに近く、一年を通して旅行やスポーツに最適な拠点です。学会やセミナー等で長野にお立ち寄りの際は、是非、お声がけをしていただければと思います。

最後になりましたが、今回、このような場でご挨拶の機会を与えて下さいました関係の方々にお礼申し上げますとともに、私も本学部卒業生の末席に名を連ねる者として、その自覚を新たにするとともに、職位の責任を鑑み、これからもより一層、教育と研究に努力、精進していく所存ですので、今後とも皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

「転出のご挨拶」



北海道大学大学院歯学研究科 生体材料工学教室

吉田 靖弘

岡山大学歯学部の皆様におかれましてはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。平成 26 年 2 月より北海道大学大学院歯学研究科生体材料工学教室を担当し、早 1 年が経過しました。紙面をお借りしてご挨拶申し上げますとともに、鈴木一臣名誉教授、松本卓也教授の下、岡山大学で過ごした 12 年弱の間、多くの先生方にご高配を賜りましたこと改めてお礼申し上げます。私が所属しております北海道大学は総敷地面積で見ると日本で一番広い大学で、実に国土の 570 分の 1、琵琶湖とほぼ同じ面積です。歯学研究科のある札幌キャンパスは、市として全国 4 番目の規模を誇る札幌市の中心部に位置するとは思えないほど広大なキャンパスで、以前は札幌駅の反対側にある時計台のあたりまで広がっていたとのこと。そのお蔭で歯学研究科・歯学部の建物も非常に大きく、歯科理工学だけの専用の実習室を持てるほど、ゆったりとしたスペースをいただいております。冬は雪で不便ですが、春・夏・秋はとても過ごしやすく、非常に良い環境の中、教育研究に取り組んでいます。

思い返すに岡山大学在籍時は、皆様のお力添えをいただき多くの研究テーマに携わる機械をいただきました。それらは現在の研究の種となっております。「生体／材料ナノ界面」をターゲットとした基礎研究では、昨年の IADR 総会で 2014 William J. Gies Award を受賞しました。岡山大学でお世話になりました共同研究者の皆様へ深謝いたします。さらにトランスレーショナルリサーチとして、日本医療研究開発機構 (AMED) など多方面からご支援をいただき、一部は来年度の実用化を見通せる段階まで発展しました。

このように幅広く研究開発を進めることができますのも、岡山大学にて多くの先生方よりご指導いただいた賜物と感謝する次第です。皆様方におかれましては、今後ともよろしくご指導、ご鞭撻の程お願い申し上げます。

「転出のご挨拶」

大阪歯科大学 歯学部 薬理学講座

河井 まりこ

岡山大学歯学部の皆様方におかれましては益々ご健勝のことと心よりお慶び申し上げます。

平成26年10月より大阪歯科大学歯学部薬理学講座で講師を務めさせていただいております。9月下旬に正式決定ということから、お世話になりました皆様にご挨拶も出来ぬまま失礼を致し、申し訳ございませんでした。

私は15期生として平成12年岡山大学歯学部を卒業後、京都大学大学院医学研究科外科学専攻を修了し、平成16年より、骨再生研究を継続したいという希望を口腔形態学 山本敏男教授のご高配により叶えることができました。その後、10年間にわたり岡山大学にてお世話になりました。この間、文科省の大学国際化プロジェクトにてドイツ・ミュンスター大学病院大学、そしてJSPSとDAADとの研究者海外派遣事業により、ドイツ・フライブルク大学発生生物学研究所での留学の機会をいただき、発生学を基礎から学ぶことができました。再生と発生は密に関連しており、私自身の骨再生研究を発展させることができました。また、岡山県産業振興財団やメディカルテクノおかやまとの共同研究事業など、トランスレーショナルリサーチも進めることができました。振り返りますと、このように自分のやりたいことをどんどん押し進めることができたのは、岡山大学に在籍していればこそのことだと、いましみじみと実感しております。

現在はほぼ3倍の学生数の講義や実習に戸惑いながら、これまでの解剖学教育で得た経験を薬理学教育にも活かすべく、新たな分野にもチャレンジしています。9月に岡山でOSCEを、そして3月にはこちらでOSCEに携わりましたが、3グループを同時に進行する壮大なOSCEに圧倒されています。研究面ではまだまだ岡山大学から自立できず、客員研究員として研究を継続させていただいております。

岡山大学在籍中は本当にお世話になりました。この場をお借りしてお礼を申し上げ、岡山大学の歯学の教育・研究の益々のご発展をお祈り申し上げます。最後になりましたが、このような機会をお与えいただきました「歯学だより」編集部の皆様にお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

「転出のご挨拶」

神奈川歯科大学 大学院歯学研究科
口腔科学講座 歯周病学分野

工藤 値英子

皆様方におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。岡山大学在職中におきましては、並々ならぬご指導を賜り、心より感謝申し上げます。

さて、26年10月1日付けで神奈川歯科大学 大学院歯学研究科口腔科学講座 歯周病学分野 講師に着任いたしました。

平成6年に岡山大学に入学し、卒後は同大学歯科保存学第二講座に入局しました。大学生生活から研修医、医員そして助教まで、岡間で約20年間勉強させて頂きました。

初めての関東生活から半年が過ぎました。神奈川歯科大学は、横須賀米軍基地に隣接しております。全長約333メートル、満載排水量約10万トン、そして約75機の飛行機と5000人以上の乗員をかかえている原子力空母ジョージ・ワシントンがその基地に入港します。横須賀は外国人が多く異国情緒ある、比較的穏やかな街です。海に面しており風のある日が多いせいか、冬は非常に寒く感じ、出来るだけ外出を控えてしまいました。これまでとは違う職場環境に戸惑いもありますが、なんとか過ごしております。

その中で、時折、岡山大学の素晴らしさに気付くことがあります。厳しさもありましたが、それを含めていい環境で学ばせて頂いたと思っております。それは、学問的知識だけではなく、医療人としての姿勢、特に、これからの歯科医師がどう社会に貢献していくべきかを考えさせられる環境であることです。その要因として、岡山大学病院は医科と歯科が一つになって患者を診ている岡山大学病院の存在があります。この環境下で教育を受ける学生が、「今後求められる歯科医療のあり方」について考える習慣を身に付けることは、本当に重要で貴重な経験であると思えます。

私も、その環境の中で身に付けてきた財産を大事にして、医療と研究に向かう姿勢をしっかりと守っていきたいと思えます。そのうち困難に出会うこともあるかと思えますが、周囲の皆様にご助け頂きながら、前向きに少しずつ乗り越えていき、新たな自己成長に繋げていきたいと思えます。

末筆ながら、岡山大学歯学部の皆様のご発展をお祈り申し上げます。



「転出の御挨拶」

大阪大学歯学部附属病院 口顎病態系科（口腔外科1（制御系））

水谷 雅英

岡山大学歯学部の皆様方におかれましては、益々ご健勝のことと心よりお喜び申し上げます。平成27年3月末をもちまして岡山大学を退職し、飯田教授のご高配により、4月より大阪大学歯学部附属病院助教として赴任致しました。岡山大学在任中におきましては、多くの先生方に大変お世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

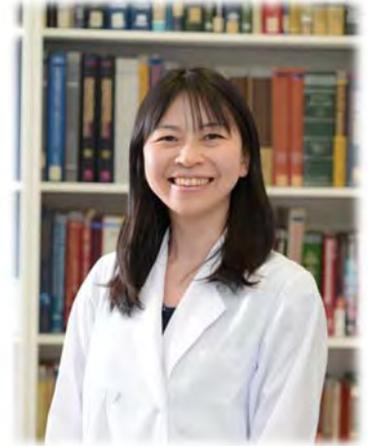


私は岡山大学歯学部12期生として平成9年に卒業後、大阪大学歯学研究科へすすみ、学位取得後は、福島県と大阪府内の病院で主に臨床を行っていました。その後、平成24年4月より15年ぶりに岡山に戻り、顎口腔再建外科学分野で3年間助教として在任させていただきました。学生時代、あまり優秀とは言い難かった私が、まさか口腔外科の教官で指導する立場になるとは夢にも思っておらず、また、15年ぶりの岡山は、街も大学病院の様相も大きく変わっており、初めはかなり戸惑いましたが、歯学部は建物もそのままで、また、学生時代にお世話になった先生方や学年の近い顔見知りの先生方もおられ、少しほっとしたのを覚えております。在任中は、臨床に関しては、悪性腫瘍、口唇口蓋裂を中心にかなり良い勉強をさせて頂いたと思います。ご指導いただきました飯田教授、また、いろいろと仲良くして頂きました医局員の先生方には心より感謝申し上げます。長いようであつという間の3年間でした。今後は、今まで学んだことや経験を糧に、さらに精進してまいりたいと思っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。末筆ではございますが、岡山大学の更なる御発展と皆様方の御活躍、御健康をお祈り申し上げ、転出の挨拶とさせていただきます。

「転出のご挨拶」

菅原 康代

岡山大学歯学部の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。私は2014年12月に岡山大学病院矯正歯科を退職させて頂きました。在任中は本当に多くの先生方にお世話になりました。



私は岡山大学15期生として卒業後、岡山大学歯学部歯学研究科大学院生として矯正歯科に入局いたしました。大学院時代には山本照子元教授（現 東北大学大学院歯学研究科顎口腔矯正学分野教授）、上岡寛教授に御指導いただき、骨に関する基礎研究に取り組みさせていただく一方で、臨床研究にも携わらせていただきました。大学院を卒業後は山城隆元教授（現 大阪大学大学院歯学研究科顎顔面口腔矯正学教室教授）の元、臨床指導や教育活動への機会を与えていただき、また骨をテーマとする基礎研究も継続して行わせていただきました。歯を動かす矯正歯科治療、新しい事を発見できる研究活動、臨床も基礎研究も双方ともに私にとっては面白く、興味を持って行えた事は、非常に幸運であったと思います。

また、在職中には結婚や出産という大きなライフイベントもありました。子供を持った後は、それまでの仕事スタイルから柔軟に対応出来るように変化させることが必要でした。その中で、私が仕事を続ける事が出来たのは元教授、現教授、ならびに医局員の先生方をはじめ、関係していただいた全ての人のご理解とご協力があったからこそだと感謝しております。

学生時代から換算しますと本当に長く岡山の地で過ごしてまいりました。第二の故郷と言っても過言ではありません。岡山大学にて私の歯科医師としての礎を築く事が出来た事に本当に感謝しております。今後も今までの経験を生かし、日々精進して参りたいと思っております。

最後になりましたが、この場をお借りして大変恐縮ではありますが、岡山大学ならびに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

「出向の御挨拶」

歯科麻酔・特別支援歯学分野

友安弓子

岡山大学歯学部の皆様方におかれましては、益々ご健勝のことと心よりお慶び申し上げます。

岡山大学歯学部 18 期生で、平成 15 年卒業後、歯科麻酔科（歯科麻酔・特別支援歯学分野）の大学院生、医員および助教として、10 年間在籍させていただいております。

この度、平成 27 年 4 月より国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）へ出向させていただくことになりました。AMED は、この度新規に設立された機構で、300 人体制でスタートします。現在準備が進んでいるようですが、私は出向者ということで事前面談もなく、4 月 1 日に初出勤する、という事以外、具体的な仕事や役割などを把握できておりませんが、現時点で理解している機構の概略を、簡単にご紹介させていただきたいと思っております。

AMED の創設の目的としては、従来の医療分野の研究開発体制における課題を解決するために、医療分野の研究開発を総合的に推進する司令塔機能が必要だとされたからです。具体的な課題解決策として、文部科学省、厚生労働省、経済産業省がバラバラに研究開発の支援（研究費の分配など）を行っているため、実用化のための研究を基礎段階から切れ目なく支援する体制の構築や、基礎研究の成果を新薬開発等に繋げるまでの時間の短縮、更に医薬品・医療機器関連分野の輸出を増やすことによる国内経済を活性化が挙げられています。

また、AMED に求められる機能として、「医療に関する研究開発の実施」「臨床研究等の基盤整備」「産業化へ向けた支援」「国際戦略の推進」が掲げられています。中でも、重点的に取り組む分野として、新薬の開発、再生医療、がん、難病などの 9 分野が挙げられています。

2 年間の出向予定ですので、その期間に歯科医師である私が専門職としてどのような仕事ができるか、またどれだけ岡山大学へ貢献できるか、分かりませんが、精一杯務めさせていただきます。

最後になりましたが、今回このような機会を与えてくださった谷本光音教授、那須保友教授、宮脇卓也教授をはじめ、推薦して頂きました多くの先生方に深謝致します。今後とも、何卒一層の変わらぬ御指導、御鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

「転任のご挨拶」

福岡歯科大学 高齢者歯科
瀧内博也

岡山大学歯学部の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。平成26年3月に岡山大学大学院を卒業した瀧内博也です。大学院卒業後、現在は福岡歯科大学 高齢者歯科にて勤務しております。福岡に来てから早いものでもう1年が過ぎました。平成27年4月からは同講座の助教に着任することとなりました。岡山大学在学中には、本当に多くの先生方に大変お世話になりました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。



私は九州大学歯学部を卒業後、1年間歯科研修医として岡山大学病院に在籍していました。その後、インプラント再生補綴学分野に大学院生として入局しました。在学中は臨床・教育・研究に触れる機会を与えていただき、大変多くのことを学ばせていただきました。なかでも研究を継続したいという思いが強くあり、縁あって、福岡歯科大学に赴任し現在に至ります。

さて、現在私が勤務する福岡歯科大学について紹介したいと思います。福岡歯科大学は、西日本唯一の私立歯科大学です。キャンパス内には福岡医療短期大学が併設されており、歯科衛生士・介護福祉士の養成を行っています。また、キャンパス内には介護老人保健施設や介護老人福祉施設の2つの高齢者施設があり、キャンパス内にいながら施設介護実習を体験できるのも特徴です。そして、現在私が所属するのが高齢者歯科となります。外来で有病高齢者の治療をするだけでなく、大学からの訪問診療で通常の歯科治療や口腔ケア、また摂食・嚥下リハビリテーション治療まで多岐にわたる診療を行っています。学生教育では、先述した高齢者施設にて介護宿泊実習を行っているのも大きな特徴です。

現在は新しい環境で、慣れないこと戸惑うことも多く、日々悪戦苦闘しています。そんな時、いつも思い出されるのは、岡山大学で見てきた諸先輩方の姿です。臨床・教育・研究すべてにおいて一生懸命に取り組まれている先生方の姿を思い出し、日々自分自身を鼓舞しています。それまで当たり前と思っていた環境は、そこを離れて初めてその有難みに気付かさ

れました。今までの自分はいかに恵まれた環境に身を置いていたのか痛感しております。そして新しい環境に身を置くことで、岡山大学での経験がいかに自分の大切なベースとなっているのかを、改めて認識しました。今後は、このベースの上に、福岡の地で様々な経験を積み、成長していきたいと思えます。今回、福岡歯科大学への赴任の機会を与えていただいたことにも、窪木教授をはじめ、多くの諸先生方に心から感謝するとともに、岡山大学大学院の修了生として、その名に恥じぬ様これからも努力精進していく所存でございます。

最後になりましたが、今後とも、何卒一層の変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。また、末筆ながら、岡山大学の皆様方の、これからの御発展ならびに御健康と御多幸をお祈り申し上げますとともに、近況報告とさせていただきます。

「退職のご挨拶」

岸本 悦央



岡山大学歯学部創設期の1983年10月に予防歯科学講座講師として九州大学より赴任し、1984年2月に助教授に昇任いたしました。以降31年6ヶ月間お世話になりました。

研究はミュータンス連鎖球菌の歯面付着、各種条件での糖代謝等についてミューテーションを利用した細菌生化学的実験を行ってきていました。赴任当初、実験設備・器具も殆どなく施設整備に追われる毎日で、臨床に割く時間が多くて研究時間がなく、将来を迷っ

ていた時に米国、ボストンのフォーサイスへの留学の機会を得ました。当時DI Hay & RJ Gibbonsの共同研究に加わり口腔細菌の唾液分画成分への付着研究を行いました。帰国後、学生諸君のサンプル提供を得て、ミュータンス菌の付着促進唾液成分が遺伝学的にHardy-Weinbergの法則に合致することを見いだしました。次に患者様の要請で口腔乾燥症を調べるうちに唾液分泌減少は老化ではなく薬剤の副作用が多いとの文献検索結果を得ました。医学部付属病院医薬品集を手動調査し、6分の1の薬品の副作用欄に口渇の記載が有ることを報告しました。その後、様々なCDデータベースで試み、薬剤部の協力を得て日本医薬品集での検索に到達し、同様の結果を得ました。今ではこの方式はいろいろな方が使われています。現実には公的なデータベースも分析可能な状態での公開はなく、企業ベースのものは高価格で、当然ですが、副作用研究では承諾されませんでした。

教育では予防歯科実習に加え、病院での一診実習に臨床系講座が協力して教育システム構築、器具等の整備などの実務に精力的に取り組み、臨床教育はそれなりの形ができました。新設校の伝統を築くため優しい中にも厳しい姿勢で学生教育にあたりました。

岡山赴任時の病院で治療に当たった時の第一印象は「えっ、まだこんなレベル。」との驚きでした。私の感覚ではかなり遅れている気がしました。それが10年以上たってみると、地域での治療の質も患者の意識レベルもあがってきて歯学部の存在意義は十分あると確信しました。また、地域での公衆衛生活動「歯槽膿漏予防教室」を20年弱継続して行いました。

母校の創設期および岡山大学の創設～成熟期に関与でき得難い時間を過ごすことができました。シンドイことも多々有りましたが、まあ、振り返れば楽しかったですね。これから第二の人生の出発となりますが、生来の新しもの好きの性格は変わらないと思いますので、歳も考えつつ、ゆっくと挑戦できればと考えています。

本学の卒業生が大学の運営にあたられる時代になり、更に独自性のある発展をされることを期待しております。ありがとうございました。

「文部科学省 課題解決型高度医療人材養成プログラム キックオフシンポジウムを開催」

医療支援歯科治療部

曾我賢彦

前述のトピックスでご紹介いたしましたように、平成 26 年度、文部科学省は、大学・大学病院を通じて、健康長寿社会の実現に寄与できる優れた医療人材を養成するため特色ある取組を公募しました。「課題解決型高度医療人材養成プログラム」と名付けられた事業で、我が国が抱える医療現場の諸課題等に対して、科学的根拠に基づいた医療が提供でき、健康長寿社会の実現に寄与できる優れた医療人材を養成するため、大学自らが体系立てられた特色ある教育プログラム・コースを構築し、全国に普及させ得るべく、これからの時代に応じた医療人材の養成に取り組む事業を選定し支援するものです。

岡山大学歯学部は、北海道大学、金沢大学、大阪大学、九州大学、長崎大学、鹿児島大学、岩手医科大学、昭和大学、日本大学、兵庫医科大学の計 10 校を連携校とし、計 11 校で本公募に事業名「健康長寿社会を担う歯科医学教育改革—死生学や地域包括ケアモデルを導入した医科歯科連携教育体制の構築—」を申請し、採択に至りました。今後 5 年間、これら連携大学とともに、岡山大学が中心となり、本邦に求められる歯科医学教育改革を強力に進めていくこととなります。

2015 年 2 月 13, 14 日に岡山大学歯学部および岡山大学創立五十周年記念館で「健康長寿を担う歯科医学教育改革 キックオフシンポジウム」を開催し、計 199 名の参加者が全国の連携大学・協力施設等から集いました。講演は e-learning 用に収録され、今後各大学の教育で生かすべくカリキュラム構築がなされていく予定です。

本事業は日本の歯学教育改革を岡山大学が主導して進めていく大変栄誉あるものであり、採択は大変喜ばしいものである一方、岡山大学歯学部の力が試されるものでもあります。真に日本において存在感を示し得る学部になるか、あるいはそうでないかの岐路に立ったとも捉えることができます。本事業では多くの教育改革において岡山大学構成員皆様のご協力が必要です。本事業を成功させ、本学歯学部が真に日本の歯科医学改革に貢献し国民の健康長寿社会に貢献する立場となれますよう、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

シンポジウム：医学部歯科口腔外科における歯科医師臨床研修プログラムの充実にむけて



『医学部歯科口腔外科における歯科医師卒後研修の現状』

全国医学部附属病院歯科口腔外科科長会議
会長

富山大学大学院医学薬学研究部先端生命医療学域分子病態医学系歯科口腔外科学講座

野口 誠 教授



『兵庫医科大学病院歯科口腔外科における歯科医師臨床研修プログラム～兵庫県病院歯科医会での活動も含めて～』

兵庫医科大学歯科口腔外科学講座

岸本 裕充 主任教授



『兵庫県病院歯科医会がめざす歯科医師臨床研修』

兵庫県病院歯科医会会長

神戸常磐大学短期大学部口腔保健学科

足立 了平 教授



『金沢大学附属病院における歯科臨床研修医教育の現状について』

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科がん
医科学専攻細胞浸潤学分野（歯科口腔外科）

川尻 秀一 教授



『歯学部学生教育ならびに歯科医師卒後研修
に関する一考察』

全国医学部付属病院歯科口腔外科科長会議
事務局

中央社会保険医療協議会専門委員

日本口腔外科学会(日本医学会第31分科会)
理事長

日本学会協議会員

千葉大学大学院医学研究院先端がん治療学
研究講座口腔外科学分野

丹沢 秀樹 教授

パネルディスカッション



講演 1



『「平時」から「有事」まで、オーラルマネジメン
ト“CREATE”を実践できる歯科医療人を養成する』

兵庫医科大学歯科口腔外科学講座

岸本 裕充 主任教授

講演 2



『金沢大医学部における歯学教育プログラム—
特色および具体的な取り組み—』

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科
がん医科学専攻細胞浸潤学分野（歯科口腔外科）

中村 博幸 准教授

基調講演



『課題解決型高度医療人材プログラム』の選定
大学に期待すること』

文部科学省高等教育局医学教育課課長補佐
島居 剛志 様

特別講演



『長寿時代のエンドオブライフ・ケア』

東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用
倫理センター

上廣死生学・応用倫理講座
会田 薫子 特任准教授

講演 3



『歯科における摂食嚥下リハビリテーションの始まりと摂食機能療法学演習例の紹介』

日本大学歯学部摂食機能療法学講座
植田 耕一郎 教授

講演 4



『北海道大学における歯科医学教育』

北海道大学大学院歯学研究科臨床教育部門
井上 哲 教授

講演 5



『長崎大学における離島医療保健実習から何を学ぶか?』

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教育研究
支援センター

総合歯科臨床教育学
角 忠輝 教授

講演 6



『離島地域を基盤とした地域歯科医療教育の
開発』

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科健康科学
専攻

社会・行動医学講座歯科医学教育実践学分野
田口 則宏 教授

閉会の辞



次回連携シンポジウム開催担当校ご挨拶

昭和大学スペシャルニーズ口腔医学講座口腔
衛生学部門

弘中 祥司教授



シンポジウムスタッフ一同

「International Symposium on Bio-imaging and Gene Targeting Sciences in Okayama に参加して」

歯科矯正学分野

上岡 寛

平成 27 年 2 月 15 日、岡山大学創立五十周年記念館にて、International Symposium on Bio-imaging and Gene Targeting Sciences in Okayama が開催されました。これは、岡山大学が、文部科学省から支援を受けてきた「岡山分子イメージング高度人材育成事業」の最終年度にあたり開催された統括国際シンポジウムです。

特別講演として、理化学研究所 脳科学総合研究センター 西道隆臣シニア・チームリーダーをお招きし、アルツハイマー病発症にいたる神経老化の最新知見をご講演頂きました。岡山大学大学院医歯薬学総合研究科産学官連携センター松浦栄次教授には、おかやまメディカルイノベーションセンター事業で進められている動脈硬化、がん治療戦略についてお話を頂きました。

ランチョンセミナーでは、京都大学 iPS 細胞研究所ゲノム・エピゲノム解析コアファシリティ 渡辺亮グループリーダーに、iPS 細胞から心筋細胞への分化のメカニズムと効率よく心筋へ分化する手法について、最近のデータをご講義頂きました。

シンポジウムでは、国際的第一人者の研究者から、異分野融合のため今後ライフサイエンスが向かうべき方向として重要と思われる「核構造のイメージング」、「ナノバイオエンジニアリング」、および「骨と軟骨のイメージング」における最前線のお話を伺うことができました。

各分野の先生方から、岡山の地ではなかなか伺うことのできないイメージングに基づいたお話を拝聴することができ、大変エキサイティングな 1 日でした。

私はプログラム委員として、久保田聡教授(口腔生化学)、松本卓也教授(生体材料学)、および大橋俊孝教授(分子医化学)らと共に、シンポジストの先生方をお呼びする機会を頂きましたが、会も盛会に終わりほっとしております。ご参加頂いた先生同士も、若手の先生方を中心に交流を深められたようです。

今回の参加を通じ、本シンポジウムが、今後さらに発展する岡山大学での分子イメージング研究のマイルストーンとなったことを感じました。

「口腔癌唯一認可の分子標的抗癌剤の PET プローブ化と、PET 画像による同抗癌剤効果判定試験の開発にむけて」

歯科放射線・口腔診断科

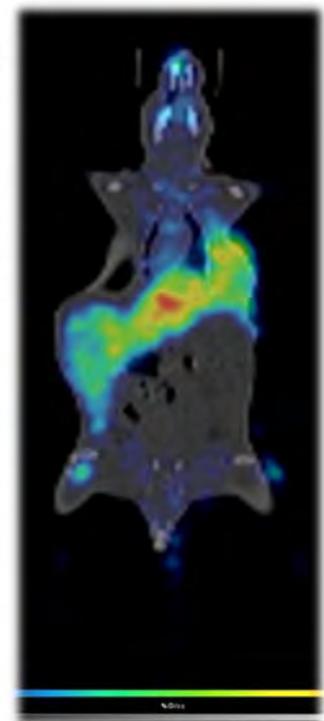
村上 純

近年、癌の化学療法において分子標的抗癌剤が注目されています。分子標的抗癌剤は、癌細胞が持つ特徴的な分子を狙い撃ちするので癌細胞だけに作用し、副作用が少ない事が特長です。頭頸部扁平上皮癌でも 2013 年頃よりアービタックス（一般名：セツキシマブ）が唯一の分子標的抗癌剤として使われています。アービタックスは、EGFR という分子を標的にするため、EGFR をより多く持つ症例に効果的です。そこで当科では、PET 検査で口腔癌患者毎の EGFR 量を画像診断するための研究を進めています。これが可能となれば、非侵襲的で高感度なアービタックスの効果判定試験として利用できます。



このテーマは、窪木拓男教授のご尽力による平成 25～26 年度文部科学省特別経費（プロジェクト分）「分子イメージング・マイクロドーズ（第 0 相）臨床試験体制を擁する分子標的治療研究・教育拠点の構築」事業の一つとして採用して頂きました。以下、基礎研究段階ながら成果をご報告致します。

まず、様々な口腔癌細胞をマウスの背中に移植し、癌を作製します。そのマウスの癌を小動物用 PET 装置（島津製作所 Clairvivo PET）にて撮像しますが、撮像に必要な、プローブという試薬を静脈から注射します。このプローブ作製とそれを放射標識する際の核種が研究のカギです。通常の PET 検査では ^{18}F という核種で放射標識した FDG という薬剤をプローブとして使うのですが、これは EGFR 量を反映する試薬ではなく利用できません。今回の目的は癌の EGFR 量計測であるため、アービタックスが EGFR を標的としてくっついていく抗体試薬である性質を利用し、ごく微量のアービタックス自体をプローブとして利用することにしました。さらに、体内に注射されたアービタックスプローブを PET 撮影で詳細に追跡検出できるように、プローブの放射標識も工夫しました。PET の原理は、プローブが取り込まれた臓器で γ 線を放出させ、その γ 線を体外から検出するものですが、当科では標識に ^{89}Zr という核種を用いまし

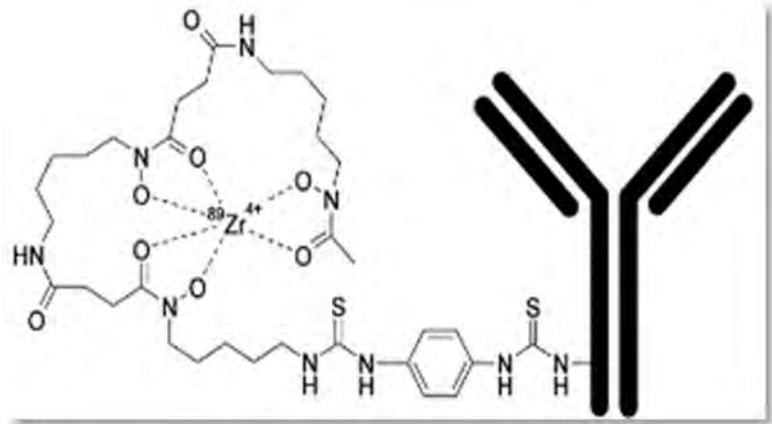


た。 ^{89}Zr は他の核種よりも γ 線を放出できる時間が長いため、プローブが十分に癌に運ばれた後に撮像することが可能で、より特異的に癌に取り込まれ、鮮明な画像を撮像できました。 ^{89}Zr を取り扱う施設は国内に少なく、 ^{89}Zr による標識プローブの国内報告は殆どありません。また、口腔癌に対するアービタックスプローブによる PET 撮像に関する国内報告もありません。今後、当科の研究を臨床試験に応用できるよう、さらに研究を続けていきます。



小動物用 PET 装置

アービタックス



^{89}Zr -DFO-mAb



「“教育功労賞” 受賞に際して」

生体材料学分野

入江正郎

まずは、学部長の窪木先生のご提案により、教授会でご推薦いただき、ありがとうございました。1月6日新年互礼会で医歯薬学総合研究科 科長の谷本先生からいただきました。授賞式は、月並みですがそれなりに緊張しました。

昭和57年4月1日に、まだ外装工事中の本学歯学に赴任しました。8階の研究室には無造作に事務机や保管庫がおいてあり、最も大きな測定機の万能試験機にはカバーがかかったままであったと、微かに覚えています。

思い起こせば、この状態からの出発でした。4月からは一期生の講義、10月からは実習（当時は80名の定員）と、こちらは実習内容や実習書の作成（手書き）など、無からの出発でした。余分を見越して100人分の実習機器や器具の準備、時間内に実施内容が終わるよう何回もトライしたのを鮮明に覚えています。研究面では、実験道具や測定機器がなく、実験しようにもまともに出来ない状況でした。12月下旬には恙無く実習が終了、最終日の総括も無事終了、涙がでるほどの満足感でした。

このような1982年度からの出発で、2014年度まで毎年、昭和59年4月赴任の田仲先生と実習に関係（3期生の後半と4期生の前半はデンマークに留学のため欠席）してきました。最近では、親子2代に渡っての学生さん（特に思い出深い西岡親子、お父様は2期生で赤磐市ご開業、お嬢様はこの3月卒業）にも接し、時の流れを感じさせられます。毎年60名程度に接し、実習机にすわって無我夢中の手作業、始めは恐る恐るですが、終わる頃には少しは手慣れてきています。このような時期に学生さんとマンツーマンで接し、この一心不乱な態度の頃に直接人間的な触れ合いを肌で感じることは、最高の思い出であり、心に残るものです。いつの時代でも、特に最近のような人間関係の希薄な時代でも、こればかりは最高の人間的な触れ合いであり、素晴らしい教育効果と自負してきました。これが歯学部の歯科理工学（生体材料学）実習の真髄と自負して30余年、時には感情を抑えつつもなんとか恙無くやってきました。そう、このような人間関係が自分のための最高の財産と思うのです。

と自画自賛しながら、30余年実習に関与してきました。このような時代だからこそ、“マメな人間的触れ合い”が大切ではないかと思いつつ。

最後に重ねて御礼申し上げます。

「岡山大学病院 医療安全管理部 歯科系外来リスクマネージャーチーム
権の木賞（病院長賞）を授賞」

医療安全管理部兼務
総合歯科
白井 肇

岡山大学病院は、歯科系の診療科として14の診療科を有し、歯科部門の1日の平均外来延患者数は650人を超えており、これら歯科関連部署より報告されるインシデントレポートは、病院全体での報告の4.6%程度を占めています。歯科外来患者のほとんどが口腔内の処置を受けるため、転倒・転落、薬物投与、患者誤認といった医科と共通するインシデントの報告以外に、これらの処置に関連した周囲軟組織損傷、誤飲・誤嚥等の歯科治療特有といえる報告が多く認められます。その様な背景から、毎月の病院全体のリスクマネージャー会議とは別に、歯科系リスクマネージャー会議を開催しています。

歯科系リスクマネージャー会議の活動としては、毎月インシデントレポートとして報告されてくる具体的事例について、各部署が事例を共有し、その対応策を各部署において考えるとともに、頻発事例については多方面からの意見を集約させるワーキンググループを形成し、根本原因分析からその対応策の立案までを行う問題解決体制を構築してきました。その具体的成果としては、2011年までは、1年間に4～5回発生していた装着前補綴物の誤飲インシデントに関しては、ワーキンググループで考えた対応策の実施以降は、ほぼゼロとなり大きな成果を得ています。また、各部署からのリスクマネージャーが常に受動型とならず安全活動への積極的参加を促すために、毎月各部署持ち回り体制でインシデントレポートニュースを作成・発行することとしています。医療安全の意識が稀薄となりがちな歯科系診療領域でのこれら積極的な活動は、歯学部附属病院間において行われる医療安全相互チェックにおいても高い評価を得ています。

また、同会議での取り組みは、歯科・口腔外科を病院内で単科として有する病院においても歯科独自のインシデントを理解する上で参考になると思われるため、国内外でその活動内容や成果について学術発表を行い、第7回医療の質・安全学会（平成24年）において“ベストプラクティス賞最優秀賞”を授賞、第9回の同学会においても同賞の最終ノミネートに残るなど学術学会においてもその活動は高い評価を得ています。

今回、この様な病院内での小さな委員会活動の一つに着目して頂き、光栄にも病院長賞“権の木賞”を頂くことになりました。本来の仕事の合間で行っている小さな委員会活動に対して光を与えて頂ける授賞に対して、大変喜びを感じますし、歯科系リスクマネージャーを代表して、関係者の皆様へ感謝の意を申し上げます。

今回、副賞として頂いた賞金から、” Risk Manager” という金色のピンバッジを作製させて頂きました。これは、他の大学病院へ相互チェックで訪問した際に、誰が自分の部署のリスクマネージャーかを各メンバーが認識していないという事例から発想を得たものです。作製したバッジは歯科系のリスクマネージャーのみならず、病院全体のリスクマネージャーにも配布させて頂いています。病院内の各部署において、誰がリスクマネージャーかを明示するとともに、リスクマネージャーのバッジを付けていることが仕事に対する誇りと責任感に繋がりますようにと個人的に願っております。

最後に、歯科系リスクマネージャーの集合写真を添えます。



「ハーバード留学記」

歯科矯正学分野

石原 嘉人

岡山大学歯学部の皆様、ご無沙汰致しております。今回5年ぶりの「歯学だより」への寄稿依頼を頂き、年月の流れを感じる次第です。私は、現在アメリカ、マサチューセッツ州ボストンにあるハーバード大学歯学部 (Harvard School of Dental Medicine) で Visiting Assistant Professor として研究生活を送っております。

私の所属する研究室は、フランス人のRoland Baron教授を筆頭に、アメリカ、ドイツ、カナダ、イタリア、イギリス、トルコ、ロシア、オーストラリア、日本、韓国、中国、インド、台湾という多国籍なメンバーで構成されています。さらに、テクニシャンを入れて20人以上の大所帯なので、文化や考え方に至るまで千差万別です。骨代謝研究において大御所であるボスは日々多忙を極めていますが、気さくでユーモアに溢れ、新たなアイデアが思いつくと「俺のクレイジーなアイデアを聞いてくれよ」と満面の笑みを浮かべて駆け寄ってきてくれます。そんなボスは、プライベートで訪日する程の親日家でもあり、日本人に対する理解も深いので大変居心地よく仕事をさせてもらっております。



歯学部の位置するHarvard Medical Areaは、世界トップレベルの研究者が集い、著名人を呼んでのセミナーや勉強会が日々行われ、その情報量と密度には随分驚かされました。また、世界的に有名な大学が密集する学術都市であるボストンには、世界中から多くの研究者、留学生が集まっております。ここでの人脈作りは、今後の私にとって大きな財産になる事を確信致しております。



今年の冬は観測史上最高積雪量を更新するという厳しいものでしたが、日も長くなり春の足音を感じる今日この頃です。この貴重な時間を実りあるものにするべく、今後も多くの事を経験し、精進を重ねていきたいと思っております。



「フィラデルフィア留学記」

口腔顎顔面外科学分野
栗尾 奈愛

2015年1月より私はアメリカ合衆国ペンシルバニア州フィラデルフィアにあるフィラデルフィア小児病院外科学講座整形外科学分野(Children's Hospital of Philadelphia : CHOP)にポスドクとして留学しています。

フィラデルフィア

フィラデルフィアはアメリカ北東部に位置する全米有数の都市でかつては合衆国最初の首都として独立宣言書、合衆国憲法が調印されるなど合衆国発祥の地として知られています。またUniversity of Pennsylvaniaをはじめ多くの名門大学が集まる学術都市でもあります。観光名所はアメリカの自由と独立のシンボルである自由の鐘 (Liberty Bell) や独立記念館 (Independence Hall)、フィラデルフィア美術館等があり映画ロッキーやナショナルトレジャーの舞台にもなっています。

Children's Hospital of Philadelphia : CHOP

私が所属するCHOPは全米初の小児病院でペンシルバニア大学病院の小児研究・臨床部門を一手に引き受け、2つのMain Hospitalと2つの基礎研究棟を中心とし市内、郊外を含めて30以上の関連施設を持つ小児医療に特化した病院であります。ラボは基礎研究棟の一つであるAbramson Research Center Buildingにあり、私のボスは長年この地で歯胚、四肢、軟骨発生のメカニズムを研究されている小山英樹先生と形成外科学分野で顎関節の研究をされているNah Hyun-Duck先生で、この二人のボスのもと顎関節の発生と維持のメカニズムの解明を主なテーマとして研究をおこなっています。



Children's Hospital Main Hospital

アメリカ生活

とはいえまだ渡米後3ヶ月、生活と実験のセットアップがようやくひと段落ついたところであり、何を書こうかと悩みましたがアメリカの病院を受診する機会があったので報告させていた



2つの基礎研究棟

だきます。アメリカには国主導の国民皆保険制度はなく、医療費を支払うのは民間保険会社です。保険点数制度はなく医療者側が決めた請求額に対し、保険会社が審査を行い実際の支払額が決定される仕組みのようです。現在、1歳の息子を連れているのですがある日、息子が”ひきつけ”をおこしたので、CHOPのEmergency Roomにかけ込みました。いろいろな検査、処置を受け、その日は経過観察目的で入院、翌日退院しました。後日、病院からの請求額は何と入院費（部屋代のみで）\$20000（ドバイのスイートルームに泊まったのかと思いました）その他の診察、検査料で\$5000でした。実際に保険会社から支払われた金額は遥かに少ないのですが、保険に加入していない場合は全額自己負担で受けることになります。職場の医療保険に加入していたので数百ドルの出費だったのですが、医療保険に入っていなかったらと思うとぞっとしました。盲腸で入院して自己破産なんてことも現実的にあるんだなと実感しました。日本の国民皆保険制度はぜひ維持していただきたいものです。皆さん留学、旅行、学会などでアメリカを訪れる際は保険加入をお忘れなく。



最後に

留学生活は始まったばかり、これからもいろいろなことがあると思いますがよい報告ができるようにがんばっていきましょうと思いますので今後ともよろしくお願い致します。

近所のBBQレストランで同僚と右列前がボスの小山英樹先生、左列中央が筆者

「インディアナポリスより」

Indiana University-Purdue University Indianapolis(IUPUI), hematology/oncology

奥井達雄

2014年5月より米国インディアナ州インディアナポリス市にある Indiana University-Purdue University Indianapolis(IUPUI), hematology/oncology 講座, 米田俊之先生の研究室にポスドクとして留学しております 21 期生の奥井達雄と申します。

インディアナポリスは五大湖の南約 200km に位置する人口約 80 万の都市です。気候は北海道の旭川とほぼ同じで、冬は非常に寒く -25°C まで気温が下がる事もありました。

IUPUI は同州南部に本拠地を持つ Indiana University と 2010 年ノーベル化学賞を受賞された根岸英一先生が在籍され、有機化学で有名な Purdue-University がインディアナ市内に設置した総合大学です。インディアナポリスは特に有名な産業も無いため街の雰囲気も落ち着いており、研究に集中するには良い環境です。

私が勤務している Toshiyuki Yoneda, G David Roodman ラボは骨髄腫、乳がんと骨微小環境の相互作用を研究主題としております。研究はいくつかのプロジェクトに分かれており、私は転移性癌により誘導される骨痛の制御、骨微小環境が癌転移に与える影響の検討などを行っております。日本で骨と癌の研究を行っていたので、硬組織研究の手技に関して困ることは無かったのですが、こちらでは主に神経学の観点から癌を研究する必要があったため、当初は Hematology/Oncology を離れ NeuroScience ラボに出向き、マウスの知覚神経細胞の単離、神経細胞の興奮の測定などを行ってまいりました。家族と離れて生活しているため、時折寂しくなることもありますが留学は業績を積むための修行と考え、もう数年頑張ろうと思っております。最後になりましたが、留学の機会を与えていただいた佐々木朗教授、志茂剛准教授をはじめ、多くの諸先生方に心から感謝し日々の研鑽を積む所存であります。



「留学生活 in Boston」

平井公人

こんにちは、ボストンのForsyth研究所に留学中の平井公人です。昨年1月からボストンに来ておりますので、歯周科の医局を離れ、早くも1年が経ってしまいました。こちらでの生活にも慣れ、毎日、研究に集中できる環境を本当にありがたく思っています。

最近FacebookなどのSNS等で日本の友人と連絡を取りやすくなってはいるものの、あまり「筆まめ」な方ではありませんので、近況報告をさせて頂く良い機会を頂いたことに、深く感謝申し上げます。

「ボストンの冬はかなり厳しいぞ」と、同じくボストンに留学されていた歯周科の大森先生から聞いておりましたが、日本から買っていった“ノースフェイス”のダウンと、“モンベル”の暖パンが大活躍で、最初の冬は、難なく乗り切れたのですが、今年の冬はマサチューセッツ州にとっても記録的な大雪の年となり、雪をかき分け通勤することもありました。岡山県南部生まれの方なら気持ちを共有できると思いますが、岡山の人間にとって、雪が積もるとちょっとウキウキする感じです。がしかし、今年はもう当分雪は見たくないと思わせるほどでした。今現在、3月も中旬を過ぎると、最高気温が氷点下を上回る日が増えてきて、確実に春が近づいて来るのを感じています。

一方で夏になってしまえば、湿度は低く、とても快適です。ボストンはアメリカで最も歴史の古い街のひとつですので、ヨーロッパの街を彷彿させるような石畳の小道にガス灯、レンガ造りの古い建物群と近代的な建築が混在している町並みが美しく、ダウントウンを散歩するだけで、とても良い気分になります。

一方で、ボストンは家賃や物価が高いことでも有名で、アメリカの中でも、最も生活費の高い都市のひとつだそうです。家賃は東京の中心地と同じくらいで、お昼に、サンドイッチとコーヒー買ったなら、10ドルくらいしますので、節約のため自炊頑張っています。とは言うものの、独身ですので、ご家族を連れて来られている他の研究者の方に比べたら、気楽なものです。

ボストンには1万人くらい日本人がいるそうですが、私のPI(Principal investigator)の佐々木・元(ささき・はじめ)先生をはじめ、他のラボですが、現在たくさんの日本人の方がForsythで研究されています。夜遅い時間だと、研究室に日本人しか残っていなかったり、困ったことがあっても日本語で聞けてしまうので、「英語がうまくならない」が悩みです。去年に比べたら少しずつは上達していますが、今年はもっと日本人以外の友達を作ることに努力が必要ですね。

Forsythは歯科研究所なので、多くの研究者が歯科医ですし、研究内容も歯科に関係したことが多いです。私のラボは免疫・感染部門に所属しており、そして佐々木先生が歯内の専門ですので、私の現在のメインプロジェクトは「HIF-1 α が根尖病変の進行と治癒に与える影響」についてです。大学院では細菌を扱う研究を主にしていたので、宿主側の免疫に関しては分からないことが多く、勉強の日々を送っています。また上記のプロジェクト以外にもいくつか研究を進めているので、数多くの刺激を受けることができ、常に勉強させられることばかりです。

私にとってボストンへ来たことが今後の臨床や研究において必ずプラスになると感じています。このような素晴らしい環境を与えて頂き、本当に感謝しております。ここで精一杯多くのことを学び、最終的には岡大に貢献できるように、3年くらいは頑張っておらいたいと思いますので、見守って頂けると幸いです。

2015年3月20日

平井公人



「ブラジルからの留学生を岡山大学歯学部を迎えて」

岡山大学病院歯科総合診断室
藤田麻里子

岡山大学歯学部では、平成 13 年度から国際交流プログラムとして短期留学制度 (ODAPUS: Okayama Dental Stay-Abroad Program for Undergraduate Students) が行われており、平成 25 年度からは、双方向プログラムとして、提携校の学生の受け入れを開始し始めました。平成 25 年度はブラジル・サンパウロ大学から 7 名、台湾医学大学から 2 名受け入れ、平成 26 年度はブラジル・サンパウロ大学から 6 名、台湾医学大学から 4 名、ベトナム・ハイフオン大学から 2 名の学生を受け入れました。私は平成 25 年度から主にブラジル・サンパウロ大学の学生たちのサポートを行ったため、報告させていただきます。

彼らの母国、ブラジルはラテンアメリカ最大の領土、人口を有する国で、母国語はポルトガル語、世界最大の日系人居住地としても知られ、日本とは歴史的に深いつながりのある国でもあります。2014 年のワールドカップ開催は記憶に新しい方も多いのではないのでしょうか。そのブラジルにあるサンパウロ大学は、ラテンアメリカで最難関といわれている大学であり、授業料が無料であることから入学試験の競争率が著しく高いことで知られています。サンパウロ大学の歯学部は 5 年制で、3 年生から 5 年生までの学生が岡山大学に留学しておりました。

彼らが岡山大学に留学している間、学内活動としては岡山大学歯学部 4 年生の講義および基礎実習の受講、歯科系の各診療室見学、留学生を対象に特別講義として行われている英語授業シリーズの受講を行っていました。臨床見学では、ブラジルでは全身麻酔下で外科処置を行う機会はないとのことで、オペ室見学は彼らにとってかなり刺激的だったようです。また、サンパウロ大学の学生は 4 年生以上の学生は各研究室で研究を行っている学生も多く、学生側から研究内容についてプレゼンテーションをさせてほしいとの申し出があり、研究発表会も行いました。学生の中にはかなり専門性の高い発表を行った者もあり、サンパウロ大学の研究力の高さに感心させられました。

勉強以外では、京都に旅行に行ったり、食事やカラオケに行ったりして楽しみました。名門サンパウロ大学の学生であっても普段は普通の大学生、カラオケに行き長時間歌ったり、食事をしながら皆で歌い始める陽気さに、私も学生に戻ったように楽しい時間を過ごすことができました。

私自身、学生時代に ODAPUS プログラムでワシントン大学に留学をし、その時は現地を楽しむことがほとんどであったように感じましたが、英語という日常聞き慣れない言語や海外の環境に触れ、多くの刺激を受けました。このように今、ODAPUS プログラムが双方向化され、彼らのサポートをする立場にいることに感謝するとともに、彼らにとってもこの留学プログラムが人生の刺激となっていることを願っています。また、今後 ODAPUS プログラムがさらに発展し、より多くの国と相互交流をしていけるよう祈念しております。



H25 年度 ODAPUS プログラム参加の学生と



H26 年度 ODAPUS プログラム参加の学生と

「台湾の留学生の方を迎えて」

小児歯科
高島由紀子

2015年2月より、台北医学大学より蔡さん、葉さん、王さん（4年生）、劉くん（3年生）の4人の学生が岡山大学歯学部にて1ヶ月間来られました。歯科麻酔歯科分野には葉さんと蔡さん、小児歯科学分野には王さんと劉くんが配属されました。登校初日は、同時期に来ていたブラジルやベトナムからの留学生も交えてウェルカムパーティーが開催されました。パーティーにはODAPUSで留学した3年生、4年生の他、各教室より先生にも多数参加していただきました。バイキング形式で和食を中心に留学生の方々に日本食を楽しんでいただきながら、歯学部の学生有志の司会によるビンゴ大会が行われました。またパーティー

では、留学生がそれぞれ自己紹介をしましたが、国によって個性が非常に感じられ大変興味深いものでした。さらに、歯科麻酔科と小児歯科の2科合同で小さなウェルカムパーティーを開催し、たこ焼きを焼きながらみんなで盛り上がりました。台湾の学生はたこ焼きを食



べたことはあっても作るのは初めてということもあって興味津々で、途中からは率先して焼いていました。このパーティーの後から、医局員との距離もぐっと縮まりました。台湾には旅行で訪れたことのある医局員も多く、台湾の食べ物や観光の話で盛り上がっていました。台湾の学生たちは、最初の2週間は、午前中は4年生と一緒に講義や実習に参加し、午後は



他の留学生たちと一緒に様々な分野の英語の講義を聴講しました。英語の講義は大変ハードだったようですが、何とか頑張ってついて行っていたようです。後半の2週間は病院の見学を行いました。病院見学の間は、医局員が引率することとなり、私たちも英語でのコミュニケーションをとる機会ができ非常に有意義なものとなりました。また、医局員たちと焼肉やイン



ド料理を食べに行ったり、学生さんたちと買い物したり、週末には大阪で観光やミュージカル鑑賞と一緒に楽しみました。学生たちは休日には中四国、さらに近畿地方にまで足を運び、有意義な時間を過ごしていました。この1ヶ月で本当に多くの場

所を訪れており、その行動力には大変驚きました。最後に、フェアウェルパーティーを開催し、皆でケーキを食べ、涙涙のお別れとなりました。あっという間の1ヶ月でしたが、この交流は、私たち医局員にとってかけがえのないものとなりました。また来年も新しい学生が来ることを楽しみにしています。この場をお借りしまして、彼らの滞在中、様々な面でお世話をしていただいた宮脇教授、仲野教授、そして医局員の皆様、ありがとうございました。



International Exchange Student Program Report

Wang, Ya-Hsuan(王雅璇)

School of Dentistry, Taipei Medical University

I am a fifth grade student of Taipei Medical University, Taiwan. On January 17,2015 , I went to Okayama University, Japan for one month for exchange student program. The program supplied four of our students to Okayama University.



At first I was very anxious, for my poor Japanese, and shy personality. I am not so familiar with Japanese culture, so I was nervous that I will make some mistake.

Turns out, I shouldn't worried so much. The staff in anesthesia department and pediatric department, which two departments took care of us, were really nice to us.

The first day we arrived at Okayama station, professor Miyawaki welcome us in person. He is a great professor who always think of us. He thought everything for us that we didn't need to buy anything for he already prepared! And so sweet he was, he arranged students who came to our school as exchange student brought us to buy bicycle, took us to know the environment(about where the shop is, how to ride bike from dormitory to school) and he also arranged different students to take us to dinner almost every night. That made us have chance to understand Japanese students more, to share different experience, to know how big the world is, and the similarity between us.

Welcoming party is the first thing surprise me. I never cook 章魚燒 before, it is really difficult to make it into a beautiful round ball. Four of us had a desk in office of anesthesia department and pediatric department. The thing I expected most every day was chatting with all the teachers in office. Even though they are teacher and we are students; they were very very busy on their job and we just followed the schedule. They still cared about us very much. They spent precious time chatted with us; took us to classroom or clinic; and always bother them if we have any problems. I learned lots from them, about dentistry, and more about culture, life style, and difference between Japanese and Taiwan. Their kindness and sweetness made me feel comfortable and warm, ease my anxiety.



In the first two weeks, we join the classes of fourth grade students. I think it was very suitable for us because the subjects are familiar to us, fifth grade students, and we can see how the dental students learn in the university in Japan. And we also invited by students to attend their badminton and 剣道 club.

We also join the experiment classes of fourth grade students, I found some things different, such as they sit like a group otherwise our seat is lined up and students just try to finish their work in Taiwan.



And the first two weeks, we also had the English lecture classes with Brazil dentistry students. The English lecture classes were very excellent.

The experience in this one month is extraordinary, we visited many places in Okayama, such as 岡山城, 後樂園, 倉敷美観, 吉備, 日生, 直島, 犬島..... I even saw the snow 2 days before I left Okayama! How lucky I am! I was already convinced myself not to expected snow in 晴れの国.



And we also visited 神戸,和歌山,奈良,姫路,京都,大阪. And on February 11th, which is Japan's holiday, Professor Miyawaki especially spent his very precious free time taking us to 出雲大社, where is a very famous shrine in Japan. And in Osaka, we saw the Disney's Lion King show in Shiki Theatre with Professor Miyawaki,

Professor Nakano, and Takashima teacher. It was the first time I saw musical show on scene. I had deep, very toughed impression. I never thought Musical show can be so attractive!



Every places I visited is very beautiful and every Japanese was really polite and kindness to me. Moreover, every Japanese food is very delicious. I really love Japan, I hope I can visit Japan again in the near future.

I was very happy to join the exchange program and stay in the Okayama University and hospital for one month. In fact, I think one month is a little too short, I hope I will have chance to come to Okayama University again in the future. This trip, I learned not only knowledge about dentistry, most important, I met some amazing people I never thought before. My vision broadened in this trip, which is very important and unforgettable. I am really appreciating for everyone who ever helped us in Okayama University and in Japan. Especially staff in anesthesia department and pediatric department. Thank you very much!

A trip I won't ever forget

Hi! My name is Leticia and I'm a fifth year dental undergraduate student from University of São Paulo – Brazil.

I was asked to talk about my experience in Japan: more specifically at Okayama University.

Before I start, I would like to publically thank everyone whom made this experience possible: Professor Emiko and Ana Cecilia from Brazil and Asaumi sensei and Mariko sensei from Okayama University. Without them, this would never have happened.

It was still 2014 when I got the news I would have the opportunity to study at University of Okayama for a month. I was on cloud nine: not only have I always wanted to visit Japan, I was going there to learn a little more about dentistry.

Three friends and me arrived in Japan after a long journey of 18.532,97 km, which is the distance between my hometown Sao Paulo and Tokyo. We were so tired but yet thankful for the dream that was becoming reality.

We decided to spend a few days in Tokyo before heading to Okayama. We really wanted to visit some sightseen spots and Disney Sea and that was what we did. Akihabara, Shinjuku, Giza, Shibuya and the list goes on and on.

Although none of us knew how to speak Japanese, we had a dictionary that would tell us the way to pronounce some words. It definitely saved our lives.

After that, we headed to Okayama by Skinkansen and I can say it was amazing. I couldn't believe a train could travel that fast.

As soon as we arrived in Okayama, Mariko sensei was waiting for us. She was so nice to all of us taking us to places, helping us to buy our bicycles and was always ready to help anytime we needed.



Here is a picture of me and the bicycle I would use everyday to go to uni. It may seem a little weird or unexpected but cycling daily to get to uni has always been a dream I hoped one day I would turn into reality. I'm a bit of American movies lover and seeing them riding up to school in their bicycles made me want to some day to

that as well. And I did. Every single day I used my bike to go to uni or to just ride around town.

On our second day at Okayama, the Oral Radiology department threw us a Welcome Party. They cooked some typical foods for us, and everyone got to know each other a little more.



Then it was time to start our activities. We had some periodontics, prosthodontics, oral radiology, oral medicine and oral surgery lectures as well as some clinical activities.

The thing I loved the most was the surgeries I was able to watch. The first one was amazing but not as exciting as the second one: Orthognathic surgery. Raquel and me were at the surgery room for about five hours and thanks to Norie Sensei, we enjoyed the surgery even more. She would stop what she was doing just so we could get close by and see by ourselves what she had just done. Also, she would explain step by step the procedures and the reasoning for that. It made me like surgery even more.

Something that I was really surprised with is the fact that students cannot assist patients before they reach year 5. In Brazil, once you're a second year student, you can start performing simple procedures with the supervision of a professor.

Yet another surprising thing was the fact that, in Japan, dentists can be oral anaesthesiologists.

I cannot keep on with this report without thanking Matsubara sensei for always being there for us and for having so much patience while explaining some CT's, MRI's, and even translating some Japanese technical words to English just so we would understand it everything.

For our last two weeks, we had some "Special Classes in English" where professors or phd/ postdoctoral students would tell us what they were researching and why they were doing so.

When it was time to get back home, I cried. I shed tears of happiness and thankfulness, not sadness. I didn't want to leave such amazing country with such extraordinary people.

Every single person that I met will forever be kept in a special place within my heart. I won't ever forget them.

I went back to Brazil with only one certain: I will be back. It doesn't matter how many years I have to wait before I pursue that but I will. That's for sure.

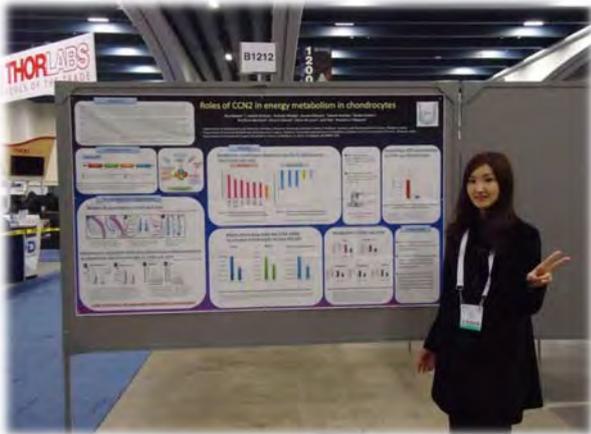


「岡山歯学会奨励論文賞を受賞して」

高松赤十字病院 歯科口腔外科
植松（前田） 彩

この度、以下の論文で、岡山歯学会奨励論文賞を頂くことになり、大変光栄に感じております。

“Aya Maeda-Uematsu, Satoshi Kubota, Harumi Kawaki, Kazumi Kawata, Yoshiaki Miyake, Takako Hattori, Takashi Nishida, Norifumi Moritani, Karen M. Lyons, Seiji Iida, and Masaharu Takigawa. : CCN2 as a Novel Molecule Supporting Energy Metabolism of Chondrocytes. *Journal of Cellular Biochemistry* 115:854–865 (2014)”



本論文は私の大学院博士課程研究の集大成ともいえる学位論文です。このような名誉ある賞に選出いただき、選考委員の皆様、岡山歯学会会員の先生方にこの場をお借りして深謝申し上げます。

私は岡山大学大学院在学中、医歯薬学総合研究科顎口腔再建外科学分野および口腔生化学分野に所属し、軟骨細胞のエネルギー代謝におけるCCN2の役割に関して研究してまいりました。CCN2／結合組織成長因子（CTGF）は、多くの細胞外分子との相互作用を通じて、軟骨細胞の分化と増殖をどちらも促進する多機能分子です。実験により、CCN2の欠損は軟骨細胞においてATPレベルの低下の原因となること、そのATPレベルの低下はCCN2を添加することでレスキューされうるということを示しました。また、CCN2が主に解糖系酵素であるenolase1遺伝子をターゲットとして、嫌気性の経路を通じたATP産生の制御をおこなっていることを示唆する結果を得ました。すなわち、本論文により哺乳類の骨成長を規定する成長板軟骨において、CCN2がエネルギー代謝を支えるという新たな役割を演じていることが明らかとなりました。臨床的観点からみると、この研究成果は軟骨組織の再生医療におけるCCN2の有用性を強調させるものともなりました。

本格的にこの研究に取り組み始めたのは大学院3年目の春でした。遅い時期からのスタートということで焦りもありましたが、素晴らしい先生方にめぐり会い、恵まれた環境の中、興味深いテーマで研究を全うすることができました。また、国内外で多くの発表をさせてい

ただき、貴重な経験を積み、己の成長を実感できました。臨床と研究に没頭し、あっという間の大学院生活でしたが、私の人生において非常に意味のある充実した4年間であったと思います。これは岡山大学で学ぶ中で数々の運命的出会いがあつてこそ感じられたことです。全ての出会いに感謝したいと思います。

2014年4月からは高松赤十字病院に赴任し、地域医療に貢献すべく、毎日奮闘しています。岡山大学大学院で培った知識と経験を基礎に、これからも熱い心を忘れず、日々精進していきたいと思っています。

受賞にあたり、ご指導ご鞭撻いただきました岡山大学歯学部先端領域研究センター・滝川正春教授、口腔生化学分野・久保田聡教授、顎口腔再建外科学分野・飯田征二教授、森谷徳文助教ならびに多くの共同研究者、医局員の方々に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。



「岡山歯学会奨励論文賞を受賞して」

いわき病院歯科口腔外科

堀切 優

この度は、以下の論文におきまして、岡山歯学会奨励論文賞に選出頂くことになり大変光栄に感じております。

Yuu Horikiri, Tsuyoshi Shimo, Naito Kurio, Tatsuo Okui, Kenichi Matsumoto, Masahiro Iwamoto, Akira Sasaki.: Sonic Hedgehog Regulates Osteoblast Function by Focal Adhesion Kinase Signaling in the Process of Fracture Healing. PLoS One. 2013 Oct 4;8(10)

本論文では、骨折治癒過程における Sonic hedgehog (SHH) と Focal adhesion kinase (FAK) の役割を分子メカニズムの面から検討しました。骨折は、口腔外科領域において比較的頻度の高い疾患です。一般的に骨折治癒過程において炎症期、細胞増殖期、仮骨形成期、リモデリング期からなり、各段階において様々な細胞、サイトカイン、増殖因子が関わっているとされていますが、その詳細な分子メカニズムについては不明な点が多いのが現状です。骨形成過程で重要な役割を担っているとの報告がある SHH と自身のリン酸化が骨芽細胞の増殖、遊走に重要とされている FAK に注目し、骨折治癒過程におけるこれらの役割を検討しました。その結果より骨髄細胞から産生される SHH が骨折断端部の骨芽細胞において FAK のリン酸化を介し、細胞増殖、分化や破骨細胞形成を促進すること、また、リモデリング期においても SHH、リン酸化 FAK が発現していることから仮骨から成熟骨への置換に関与している可能性が示唆されました。整形外科領域では骨折治療において治癒促進のため低出力超音波パルス (LIPUS) を用いた治療が普及してきているようです。超音波が骨芽細胞と軟骨細胞において FAK のリン酸化を活性化させ、骨化を促進することが分かっています。SHH においても局所投与等で骨折治癒促進に寄与できる可能性があると考えております。

大学院を修了後、大学を離れ、赤穂中央病院で2年間勤務した後、4月から香川県のいわき病院で臨床を行っております。振り返ると大学院での研究生活は、精神的に落ち込んだり、苦い経験がいろいろ思い出されますが、大変有意義な時間であったと思います。

最後になりましたが、御指導いただきました佐々木朗教授、志茂剛准教授をはじめ口腔外科(病態系)の諸先生方に深く御礼申し上げますとともに、賞に選出して頂きました岡山歯学会関係各位の先生方にこの場をお借りいたしましてお礼申し上げます。

「岡山大学病院卒後臨床研修の現状と課題」

総合歯科

白井 肇

平成 18 年度に歯科医師卒後臨床研修が必修化されて以来、今年度で 10 年目を迎えることになった。それは卒後臨床研修センター歯科研修部門として、10 期生を迎えることとなったことを意味する。鳥兔忽忽を感じる。今では、必修化以降の研修了生の多くが各専門診療科の教員となり、研修歯科医の指導に携わってくれている。



研修歯科医に対して熱心に臨床指導している彼らの姿をみて個人的に日々喜びを感じている。センター設立当初は、診療技術は“先輩の背中をみて自分で学び取るもの”という風潮であったので、診療技術に関しては、“学内の先輩諸氏に学ぶ”というよりは“学外の講習会にひそかに出かけ自力で学び取ってくるもの”という感じであった。それ故に、後輩から質問を受けた先輩は後輩に対して“謎かけ”のような回答をし、自ら苦勞して得た診療の本質については決して後輩に安易には伝達しないという風潮にあったと記憶している。私としては、その徒弟制度的な体制を自ら研修歯科医に指導していくことによって、悪しき慣習をどうしても変えたかったので、専門診療科において 5 年かけて学ぶことをいかに初期研修の 1 年間で伝えきるかということ自らの教育目標とした。先輩から全力で教えられた者は、包み隠さず後輩に対して教える人材となって育つと信じている。

岡山大学病院の歯科医師卒後臨床研修プログラムは、鳥井教授の信念によって、原則的に全員が同じプログラムを履修するボトムアップをベースとしたものとなっている。この点において他大学において一般的に行われている学びたいものだけが選択する選択プログラムの集合体であるプログラムとは似て非なるものであり、岡山大学病院の研修を修了した研修医の質の管理という観点において、大きく寄与しているものと思われる。最近では、出身大学でもなく出身地でもない他大学出身の優秀な学生が、岡山大学の歯科医師卒後臨床研修プログラムを選択してくれるようになっている。岡山大学病院のプログラムを何故選択したのかをアンケートからは、外部からは実に 96%の者が岡山大学病院のプログラムそのものの良さに惹かれ、本院のプログラムを選んでくれている。そして、4 月当初

の面談では、1年の初期研修終了後は、出身大学や出身地に戻って研鑽すると宣言していた者が、後期研修医や大学院生として本学で引き続き歯科医師としてのキャリアを積むようになってきているのも事実である。



今後は、岡山大学歯学部を卒業する学生数が減少する為、現状の定員数を維持するためには、全国の他大学の学生に向けて岡山大学病院の卒後臨床研修プログラムの魅力を発信していくことが大変重要となっており、研修施設としてマッチ率100%が今後も維持していけるように日々教育に情熱を傾けていきたいと思う。

設立当初は、鳥井教授、私そして鈴木先生と専任教員3人で始めた部署ではあるが、鳥井教授の人徳と周囲の皆様のご理解とご協力により、今では総合歯科所属での大学院修了生も3名加わり、総員14名の部署となった。部屋の中は多少手狭にはなったが、医局らしくなり、ようやく屋根瓦式の教育ができる環境が整ったと思われる。

専門性の高い診療分野そして各研究分野としての魅力を新人歯科医師に伝えていくためには、一人でも多くの者が、“岡山大学病院で初期研修をしたい”と思うことが大変重要である。初期研修が魅力的になり、優秀な多くの者が集う場を大学病院として若い世代に提供することができなければ、各分野の教員が若い世代に魅力を伝えるチャンスさえも奪われる結果を招くことは容易に想像できる。我々総合歯科のスタッフは、優秀な人材を集め切磋琢磨する場を提供し、自分が歯科医師としてどうありたいかを見つめ直した上で、各医局に送り込む使命を担っており、そのことが岡山大学歯学部の発展に繋がっていると信じて、日々過ごしておりますので、今後も各講座・各分野そして各診療科の皆々様の初期研修に対するご理解とご協力をよろしくお願い致します。

「単独型プログラムを選択して」

平成 26 年度 岡山大学病院 卒後臨床研修修了

歯周病態学分野

伊東 昌洋

岡山大学歯学部 29 期卒業、平成 26 年度卒後臨床研修を修了いたしました、伊東昌洋と申します。「単独型プログラムを選択して」ということで、この 1 年間の研修の思い出を少し綴らせていただこうと思います。

私は、岡山大学病院歯科の単独型プログラム（俗にいう 1 年コースです）のコース 3 を選択しました。この単独型プログラムは、週に 3 回、総合歯科で自分の担当患者さんの診療を行い、週に 2 回、保存系と補綴系の選択した科の診療室をまわるといふ、岡山大学出身の私にとってはとても魅力的なコースでした。

卒後臨床研修センターには研修医序盤から最後まで、とても役に立つた皆さんの書籍があり、また、指導医の先生と密に診療に関するディスカッションができる電子ポートフォリオがありました。

このポートフォリオは、毎診療後に指導医の先生宛に自分の診療に関する評価、反省、次への課題を書き、提出するもので、ポートフォリオ 1 件 1 件に指導医の先生からの返答が返ってくるというものです。このシステムのおかげで、診療が終わるとすぐに自分のその日の診療について課題を見つけ、次にどうすれば良いかを考える癖ができました。この癖は、今後の歯科医師人生で非常に役立つものであると感じています。

また、このシステムには、過去のポートフォリオを閲覧できるという特徴もあり、今までの先生が、ちょうど研修医のときに何を悩んでいたか、というのがわかるようになっていました。これもまだ歯科医師 1 年目で経験に乏しい私たちには非常に有用なものでした。もちろん、ネットワーク上の繋がりだけでなく、直接指導医の先生といつでもディスカッションできる状況も整っており、わからない事があればすぐに相談できるようになっていました。

週 2 回の専門科での研修も、今までの 1 診でみてきた症例と比べて、より、専門的で、高度な症例が多く、毎日が新鮮で、勉強になりました。1 診のときにご指導いただいた先生の補助につかせていただくことも多々ありましたが、1 診の時とは異なり、歯科医師として接していただいている感じがして、個人的にはそれもすごく嬉しいポイントでした。

加えて、口腔外科、矯正歯科、歯科麻酔科、スペシャルニーズ歯科、医療支援歯科など、より専門性の高い科での研修もそれぞれの科の先生にご指導いただき、勉強になりました。

このように、私の岡山大学での研修は非常に充実していました。こんなにも時間のたつの

が早い1年は初めてだったかもしれません。ご指導くださった先生方には本当に感謝しています。これからもこの1年で学んだことをベースに、様々なことを学び、歯科医師として成長していきたいと思います。まだまだ未熟な私ですが、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。



2014/11に佐賀県鳥栖市で行われたOBデンタルに岡山大学歯学部サッカー部OBチームで出場し、見事優勝してきました！

「複合型研修プログラムを選択して」

平成 26 年度 岡山大学病院 卒後臨床研修修了

歯科麻酔・特別支援歯学分野

三宅 沙紀

昨年 4 月から岡大病院で研修医生活がスタートし、早 1 年が経とうとしています。私は研修プログラムの B コースを選択したので、初めの 8 か月間は大学病院で研修し、12 月からは倉敷市にある開業医で 4 か月間の研修を受けました。

大学病院の頃は、予診室で初診患者さんの問診をとったり、メンテナンスや指導医の先生方のアシスタントがメインの研修でした。しかし、開業医では、最初のうちはアシスタントをしていたものの、徐々にカリエス処置や根管治療、抜歯などの「治療」がメインとなり、処置の難易度が高くないものであれば、自分が主治医として患者さんをもつようになりました。これには、学生の頃の臨床実習の経験が大いに活かされました。臨床実習で身につけることができた「患者さんと話す力」や「分からないことを調べる・考える・尋ねる姿勢」は自分を評価してもらうひとつのツールだったと思います。

開業医での研修が始まって一番に驚いたことは、自発痛を訴えて救急来院する患者さんの多さでした。大学病院にいた頃は“世の中にはもう深部カリエスをつくるような人はいない”くらいに思っていました。しかし、現実には「歯が痛くて夜も寝られない。何とかしてくれ」→診査・診断→不可逆性の歯髄炎→抜髄処置となる患者さんがたくさんいました。たった 4 か月間で、大学病院にいた頃の何倍もの根管治療を経験し、一次医療機関が患者さんにとって駆け込み病院であることを実感しました。

自分が主治医となって痛感したのは、限られた診療時間のうちに目標としていたところまで処置を終えることの難しさでした。もちろん、まだまだ経験が浅い分、他のドクターに補助していただきながらの診療ですが、自分で考えて実践した結果、想像と現実のギャップに苦戦しました。



視野を確保することの難しさ、適切な器具の選択と操作、それらを患者さんの協力を得ながら進めていくこと等、配慮する点が多岐にわたり、歯科医療は対人サービスであることに加え、知識と経験が重要な技術職の面もあることを痛感しました。

また、大学病院では常に同級生に囲まれた環境ですが、開業医では歯科衛生士、歯科助手、受付などの異職種の方たちと良好なコミュニケーションを築かなければ、思うような良い仕事できません。新社会人となって、自分だけではできない事が山ほどあることを改めて感じました。

私はこの春から大学院に進学します。それもあり、一度は地域の歯科診療の現場を経験しておきたいという思いから複合型研修プログラムを選びました。開業医で研修できたことは、私の視野を広げる非常に有意義な時間でした。上手くいったり上手くいかなかったりの日々でしたが、いろいろと経験させていただき、1年で大きく成長できました。支えてくださった皆さまに感謝の気持ちでいっぱいです。これからも努力を惜しまず、頼れる存在となれるよう謹んで参ります。



「東京デザイナーズウィークに出展して」

岡山大学歯学部 6年
実藤和典

この度、生体材料学分野、松本卓也教授のサポートの下、2014年10月25日から11月3日にかけて明治神宮外苑絵画館前(東京都新宿区)にて開催されました「TOKYO DESIGNERS WEEK 2014」に、医療系の学生としては初の出展を行いましたので、ご報告させていただきます。

東京デザイナーズウィークとは、国内外のアーティスト、企業、ブランド、デザイナー、学校が一堂に会し、デザイン・アート・ミュージック・ファッションなど最先端のクリエイティブな作品を発表し合う、国内最大級のクリエイティブ活動の祭典です。今回私は、日本を代表する美術大学や芸術大学が名を連ねる学校作品展に、医療系の学生として初の出展を果たしました。今回ブースで展示した「Q-ticket (クチケット)」



シリーズは、使い捨てのカード型オーラルケアグッズです。歯ブラシや糸ようじなど、様々なオーラルケアグッズを使い捨てのカード型に統一することで、コンパクト、清潔、かつおしゃれに持ち運べるようにデザインしたものです。また、その組み合わせをアレンジすることで、普段使い、介護用、災害時用など様々なシーンを想定したキットの提案も行いました。嬉しい事に、来場者からは商品化を望む声が後を絶

たず、私たちの活動を複数のメディアに取り上げていただきました。

しかし、ここに至るまでには様々な困難が待ち受けていました。誰も教えてくれないデザインの技術、ブースや作品製作のノウハウ、限られた予算、そして多忙を極める臨床実習。おまけにこのような活動に興味を持ち、サポ



ートしてくれる学生も少なく、全てが手探りの状態でした。そんな中、最後までサポートして下さった先生方、連日深夜まで製作に付き合ってくれたプロジェクトチームのメンバーにはとても感謝しています。

今回出展に踏み切った事で、常識や固定概念に対して疑問を持ち、問題点を洗い、具体的な解決方法まで導き出す思考回路が身につきました。医療は日進月歩と良く言いますが、その歩みは日常の疑問を突き詰めていく事から始まるのではないかと思います。そのアイデアを実現させるための手段としてデザインがあるわけですが、製作に必要なプロ向けのソフトウェアや機械も安く手に入るようになってきており、素人でもアイデアを形にしやすい時代になりつつあります。これからは、私達のように専門分野に携わる人間が、その知識や経験から生まれるアイデアをどれだけ形にしていけるかが、これからの社会にとって非常に重要になってくるのではないかと思います。



いよいよ最終学年になります。臨床実習は多忙を極め、国家試験が迫り、進路も決めなければなりません。今回の活動によって得られた経験と知識を今後どのような形で活かしていくべきかまだ模索中ですが、将来は一人の医療人として、社会を一步前に進められるような仕事に携わりたいと考えています。

「スチューデントクリニシャン・リサーチ・プログラムに参加して」

歯学部 5年
大山 剛平

平成 26 年 8 月 20 日、東京の歯科医師会館で開催された第 20 回スチューデントクリニシャン・リサーチ・プログラム (SCRP) 日本代表選抜大会が行われました。SCRP は歯科医師会主催で毎年実施されている英語による研究発表会で、現在では日本を含め世界 36 か国において、各国歯科医師会の主催により開催されています。本年度の日本大会には、これまでで最多の 28 校が参加し、各大学の代表学生がポスタープレゼンテーションを行いました。

私は、3 年次の 10 月から 2 ヶ月間、同学年の宇野さんとともに、予防歯科学分野に配属され、研究活動に参加させていただきました。はじめは研究の内容を理解するだけでも時間がかかり、四苦八苦していたことを覚えています。それでも、同学年の皆に協力してもらってデータを集めたり、分析結果をどのように解釈すればいいのかを考察したりするうちに、研究の難しさや面白さに触れることが出来ました。

学年での研究発表会も終わり 4 年生に進級した頃、SCRP 出場のお話をいただき、チャレンジさせていただくことにしました。しかし、この時の私は、研究を英語で発表するということの重大性を理解していなかったのです。まず、先の学年発表会で使用した抄録を英訳することから始めました。冒頭の、「アセトアルデヒドは動物実験において発癌性が認められており、ヒトに対しても同様に、発癌性物質である可能性が示唆されている」という一文を約 30 分かけて英作文し終えた時、私はすでに半泣きの状態でした。そして、何日もかけて「英文の抄録めいた何か」を完成させ、担当の先生に提出したところ、添削されて返ってきた抄録は、修正と呼ぶにはあまりにも劇的な変貌を遂げていました。

それからの 4 ヶ月間、予防歯科学分野の先生方に多くのご指導と励ましをいただき、大会当日を迎えることができました。大会では、審査員 3 人 1 組、合計 3 組に対して 3 回のプレゼンテーションを行います。プレゼンテーション後の質疑応答では、「This is this」といった謎めいた表現を駆使しながらも、なんとか言いたいことを伝えることが出来たと自負しております。岡山大学歯学部代表として、昨年度優勝された王先輩に続き、入賞を目指して努力しましたが、結果、私の力不足により、入賞することは出来ませんでした。しかし、審査後に、研究に興味をもったと質問をしてくださる方々がいらっしやう、非常に嬉しく思いました。と同時に、外に向けて発表することの責任の重さを感じ、本当に価値ある経験をさせていただきました。今回の経験を活かせるよう、これからも努力していきたいと思っております。

末筆ではございますが、貴重な機会をいただき、また、ご多忙の中、多大なご指導をいただきました森田教授をはじめ岡山大学歯学部予防歯科学分野の先生方に、心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

「平成 26 年度 歯科衛生士室 活動報告」

歯科衛生士 三浦 留美

歯科衛生士 高橋 明子

◆歯と口の健康週間イベントを開催◆

H26年6月5日(木)に「歯ッスルフェアー2014 ～ピカピカスマイル de キラキラライフ～」を開催いたしました。目的は、市民の方に当院を知っていただき、歯科疾患の予防やより専門的な歯科知識を学んでいただく事です。今年も盛況なイベントとなり、多くの方々に参加していただきました。中でも「歯科衛生士による体験ブラッシング」は好評を得ており、予約の30名分があつという間に埋まってしまい、後はお断りする事態となってしまいました。例年、多くのファンが来られます「チェロとピアノの生演奏」は、今年も三船文彰先生をお招きし、大盛況に終了いたしました。今年度は右下写真の缶バッジも作製し、職員間でもこのイベントを周知するよう働きかけました。今後とも皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。



◆第35回 岡山歯学会学術集会 歯科衛生士セッション報告◆

平成26年10月26日(日)に、第35回岡山歯学会学術集会 歯科衛生士セッションを開催致しました。

今回は、『歯科衛生士教育を考える～新カリキュラムと旧カリキュラム、何が違う?～』と題し、歯科衛生士養成学校の教員や口腔外科(病態系)とスペシャルニーズ歯科センターの先生方を講師にお迎えし、御講演頂きました。歯科衛生士養成学校の関係者や岡山県歯科衛

生士会の会員など、約 90 名の参加があり、大変盛会なセッションとなりました。

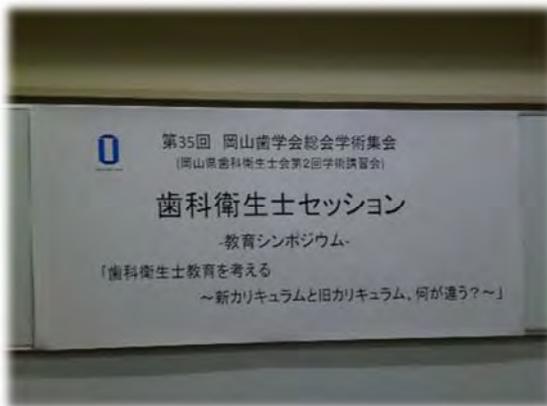
《講演プログラム》

講演 1：「歯科衛生学の確立を期待する」

講演 2：「いま歯科衛生士に求められる全身管理とは？」

講演 3：「歯科衛生学教育における『高齢者歯科・障害者歯科』」

講演 4：「口腔機能療法で歯科衛生士学生は何を学ぶ？」



◆11月8日「いい歯の日」イベント開催◆

皆さまご存じでしょうか？岡山県の条例で11月8日は「いい歯の日」と制定されています。県民の歯の健康に関する意識の醸成を図ることが目的です。岡山大学歯学部は岡山県歯科医師会とともに地域保健活動を推進するため、今年H26年11月8日（土）に「歯と口の健康を考える集い」を岡山大学病院 Junko Fukutake Hall にて開催いたしました。公開講座として、下記の2講演を行い、好評を得ました。

講演 1：「健康長寿宣言」～高齢者の「食」を基盤とした

健康増進、介護予防、虚弱予防に向けて～

岡山大学歯学部長 岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 インプラント再生補綴学分野

教授 窪木 拓 男

講演 2：「口の健康とソフトランディングエイジング (SoLA)」

岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 歯周病態学分野

教授 高 柴 正 悟

その他にも「細菌カウンター」による口腔内細菌数の測定や、岡山大学病院歯科診療科の案

内パネル展示、岡山県歯科医師会や岡山県歯科衛生士会作成パンフレットの配布等、幅広い年齢層の方が楽しめるイベントになりました。今後も、県民の方々の健やかな生活に貢献できるように活動していきたいと思っております。



◆受託実習受け入れ状況◆

平成 26 年度は、歯科衛生士養成学校全 7 校（岡山県内 3 校、広島県 1 校、兵庫県 2 校、香川県 1 校）より、約 330 名の受託実習生の受け入れを行いました。

当院の歯科衛生士室は、全国歯科大学附属病院歯科衛生士協議会の中でも、有数の「チーム医療」参加が多い室です。そこを学びたいと特定して実習に来る養成校も増えてきました。今後も実習に来られた歯科衛生士学生には、大学ならではの歯科衛生士の役割を学んで帰って欲しいと願います。

各診療科の先生方や関係部署の職種の皆様にご協力頂きながら、引き続き歯科衛生士受託実習生の教育に寄与していきたいと思っております。宜しくお願い致します。

「平成 26 年度の技工室」

診療支援施設技工室

神 桂 二

本年度も歯科技工士 8 名で歯科診療支援、医科との連携部署では頭頸部がんセンター、周術期管理センター、NST などで、チーム医療の一員として診療支援を行っています。

平成 18 年 3 月に導入された 3D プリンター (ZPrinter310Plus) も稼働期間を終え、財政難の中ではありますが、9 年ぶりに平成 27 年 2 月 ProJet460Plus に更新されました。口腔外科、医科からの依頼にも引き続き対応出来る事と成り、医科に対し歯科技工室をアピールできる事に成りました(図 1)。

ペリオ人材育成研修センターでは「周術期チーム医療認定歯科技工士」の認定を 5 名が取得しており、更に 1 名が取得予定であります。また、歯科における医療安全への貢献を評価していただき歯科系外来リスクマネージャーチームの一員として岡山大学病院長賞(権の木)を平成 24・25 年度に続き 3 年連続で受賞に係わる事が出来ました(図 2)。

教育および地域貢献として、穴吹学園大学、朝日高等歯科衛生専門学校、インターナショナル岡山歯科衛生専門学校の 3 校から学生の技工室見学実習を受け入れ、岡山歯科技工専門学院では特別授業を行いました、また、邑久光明園からも歯科技工士の病院研修生を受け入れています。

技工室は、医療技術支援部門として歯科および医科・歯科連携治療に支援・貢献できるよう今後も努力していきたいと思っております。

「平成 26 年度の活動」

- ・ 4・5・6 月 CAD/CAM 勉強会 (刀 system・Aadva system・KaVo ARCTICAsystem・CEREC・S-WAVEsystem)
- ・ 6 月 5 日 (木) 歯の衛生週間イベント (図 3)
- ・ 10 月 26 日 (日) 第 35 回 岡山歯学会総会・学術集会 歯科技工士セッション
 - ① 「摂食嚥下の機能解剖」
医療法人須藤歯科診療所 副院長：須藤健太郎先生
 - ② 「臨床ケーススタディーバーチャルから総義歯まで徹底解説」
和田精密歯研株式会社：山下正晃先生
- ・ 11 月 12 (水)・13 日 (木) 桑田中学職場体験学習 (図 4)



図1 新しく導入された3Dプリンター

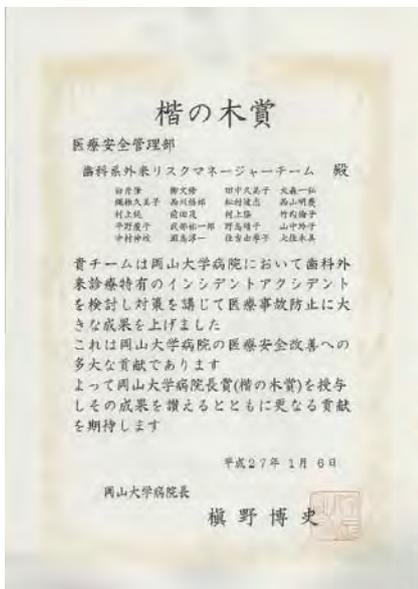


図2 楷の木賞賞状



図3 歯ッスルフェアへの展示



図4 中学生の職場体験 マウスプロテクターの作製 3Dモデルプリンターの見学



改装された医員技工室

「編集後記」

皆様のおかげをもちまして「歯学だより vol.10」を無事発刊することができました。大変お忙しい中、快くご執筆をお引き受け下さいました諸先生方に心から感謝いたします。10号ということで、今まで以上に、岡山大学歯学部に関わっている皆様が、読んで元気になるような物をとの思いで、作成してまいりました。

皆様からの寄稿を読ませて頂いておりますと、歯学部というのは学問という体系から見ると、ほんの小さな一部分であるかもしれないけれども、それぞれの人にそれぞれの活躍するフィールドがあり、お互いが支えあいながら集合体となっていることに改めて気づかされました。毎号発刊が春とのことなので、今号から4月から着任した人を含めて、一人でも多くの人に寄稿をとの思いから、寄稿を募った結果100ページを超えるものとなってしまいましたが、大きな視点からフィールドを広げる人、与えられたフィールドの中で一生懸命頑張っている人。それぞれの思いが詰まった冊子になったのではないかと思います。

非常に残念なことではありますが、寄稿をお願いしたにも関わらず、締切日の関係で寄稿頂けなかった方々や、編集終盤になって寄稿を依頼しておけば良かったと思う方が何名か出てしまいました。是非、次号の歯学だよりに寄稿頂ければと思います。本誌へ掲載できなかったことを心よりお詫び申し上げます。

歯学だより Vol.10 編集委員長 白井 肇



歯科系広報専門部会（平成26年度委員）ならびに協力を頂いた先生



部会長 窪木 拓男
総合歯科 白井 肇
むし歯科 神農 泰生
歯周科 伊東 孝
クラウンブリッジ補綴科 水口 一
咬合・義歯補綴科 川上 滋央
口腔外科（再建系）水川 展吉
口腔外科（病態系）岸本 晃治
歯科麻酔科 樋口 仁
歯科放射線・口腔診断科 村上 純
予防歯科 竹内 倫子
小児歯科 藤田 一世
矯正歯科 星島 光博
スペシャルニーズ歯科センター 森 貴幸
歯科衛生士室 高橋 明子
歯科技工室 神 桂二
医療情報部 小河 達之
口腔機能解剖学 丸濱 功太郎
口腔生理学 美藤 純弘
口腔生化学 西田 崇
口腔病理学 高島 清文
歯科薬理学 十川 千春
生体材料学 岡田 正弘

〈協力を頂いた先生〉

口腔形態学 池亀 美華
口腔微生物学 苔口 進
歯科総合診断室 藤田 麻里子
医療教育総合開発センター 吉田 登志子
歯学部口腔領域研究センター 滝川 正春